ながれに
かすみて

超越

超越

【登場人物】

　本田宗（ほんだつかさ）……美術部の残念貴公子。
　晴井ディナ（はれいでぃな）……アメリカから来た天才科学少女。

　山葉春（やまははる）……クールビューティ副会長。
　鈴木ラン（すずきらん）……漫研のエース。脂っこい。
　川崎善二郎（かわさきぜんじろう）……アマガエル色の脳筋。

　元口小生湖（もとぐちこもこ）……ランの相方。美人。
　梶場水ト（かじばみと）……ワンマンブロードキャスター。

襲来

「おるかー！」

　昼下がりのわれらが美術部。
　製作に奮闘する部員たちの集中を破ろうとするが如く、部室のスライドドアが天の岩戸のように激しく開く。
　過重労働によってもう自分が何者なのかわからなくなった宅配便ドライバーのような雄叫びをあげる来客の声はしかし、高くて可愛い。

　俺は目立たぬようにはしゃがぬように生きる小市民なので、こういうお呼び出しの類とは無縁だ。製作に勤しもう。ここがもうちょっとアレなんだよな……

「わ、また変なの来た」
「副長ー」

　知らんふり知らんふり。

「あ、また寝たふりしてるー」
「こんなもん副長マター以外の何物でもないじゃないですか、時間の無駄だから火急的速やかにご対応ください」
「こんなもんとはなんだこんなもんとはー！　貴様らの部には客人をば手厚くもてなすアジア的美徳がないのかー！」
「どう見ても疫病神とか疫病のたぐいじゃないですか」
「フッ。そんなに誉めるな」

　かなり懐かしい感じの掛け合いが繰り広げられるので若干参加したかったりしたくなかったりしてウズウズするが、ガマンする。
　一周回って来るよ、来る。
　八〇年代は絶対来る。
　漫才が正統派しゃべくり漫才に回帰したように。

「とにかく窓際でティッシュと格闘しているのがウチの一人UMA特捜隊なので」
「イエティ扱いいたみ入る。
　ここの責任者は誰だー！」
「局長呼びますか。呼んでいいですか」
「例のか。いや、やめとく。いま必要なのはアレだ。
　……おーい、コラー、おまーがさっさと返事せんからだなー」

　製作に没頭する。
　……うむ、ここにこうして……こう！！
　覗き込まれる……気配がする。

「……なんだこりゃ？　『僕のオナニー大作戦』？」
「『宇宙の創生と人類の希望』ですよ！　どこをどう見たらそんな中学生男子みたいなタイトルが沸くんですか！」

　俺がナウまさにクリエイトしていたインスタレーションはそう、10号の大きな白いキャンバス、の上に貼

った画用紙にティッシュに白絵の具を染み込ませてくしゃくしゃと丸めたものをどんどん貼り付けていく、想いのままに心のままに、イエス！イエズス！という極めてナチュラル・ボーンヘッドなものだ。
　どこをどう見たらそんな風に見える。
　心が汚れてはいませんか？

「現代美術はわからんなあ」
「わからなくていいわ。感じて」
「『感じろ』言う前に感じさせろよ、アーティストだろ」
「ぐっ。痛いところを。
　そんな鋭い言葉の槍でキリストの脇腹を抉る貴様、一体何奴」

　振り返る俺の眼前に、ちいさな少女が居た。
　金髪で抜けるように白い肌、アメリカン・カートゥーンに出てくるイジワル少女そのままの表情で挑戦的な笑みを浮かべながら、腕組みで俺を睨めつける。

「貴様が噂の本田宗だな」
「質問に答えて下さい。
　えっ。
　噂になってます？」
「口を揃えて『美術部の残念貴公子』ってっからどんなタマかと観に来てみれば、観たまんまだなおまー」
「それよく言われるんですけど本人に自覚無いんですけどねえ」
「自分からそう自称してりゃ痛とーてしょーがないわ。
　……ふふん、いやむしろ予想通りでちょーどいい。
　ちょっと付き合え」
「は？　いや、僕にはまだこの未完成交響曲が」
「こんなものいつでもできるだろちゃちゃっとー」
「なにを言うんですか、これ僕ここまで来るのに二週間」
「はあ！？」

　アメリカ人かな。

　外人さんをパロってる芸人さんみたいに大きなリアクションだ。

「それホントですよ〜。副長ずっとそれ掛かりっきりで〜」
「これ、こんなもんにかぁ！？」

　助け舟を出してくれた原田にも怒鳴る。

「副長には副長のこだわりがあるんですよ。きっと」
「お前らが甘やかすからいかんのだ。
　こんなもんは……
　こうーーーーーーーーーーー！！」

　あ、と思う暇もなく。

　びりびりびりびりびりびりびりびり……

「あーっ！」

　真っ二つ。破き割かれたその片割れが、ハラリと落ちた。
　……人生はみな、虚しい。

　ピカッと閃いた！

「……これでいきましょう！　これで！　この落ちた状態！　これまで含めてこの作品！　むしろこれしかない！　左手に生、右手に死！　これが新しい太極図！　そう作品名は『ネオ・ユニヴァース』！
　……あなた、えー、先輩？」

　だというのはタイの色でわかるので、

「……どなたと申されましたでしたですかね」
「晴井だ。三年の晴井ディナ。
　ディナでいいぜ」
「ディナさん最高！　さすがは月と芸術の女神アルテミス！」
「残念ながらダイアナじゃねーんだが、ま、いい」

「破く、破くという発想に、こんなカンタンなそして効果的なことに、なぜ俺は、なぜ俺は何週間も至らなかったのか……
　あーーーーーー！
　猫のトイレは、システムトイレーーーーー！！
　砂弄り無用ーーーーーーー！！」

　二週間溜めたウンコスが最後のしっぽのところ綺麗なカーヴを描いてしゅぽーーーんと出た後の晴れやかさに舞い上がりながら俺は、思わず晴井先輩の両手を握りしめてしまった。
　それは小さく、片手で両方包めてしまう。
　しかしそれ越しの大きな瞳はよく見ればヴァイオレットで、
　おお、エリザベス・テイラー。
　よく見りゃもんのすごい美少女だな。
　は、ニヤリ、とまた口の端を大きく上げて笑った。

「……本物だな。
　気に入った。

　ついてこい」

　ぐいっ、と引っ張られると……その力は無いに等しいもので、まるでリードに繋いだネコに引かれる程度ではあったのだが……といっても俺はネコをリード散歩させたことは無いのだが……とにかくそんなかんじ、ってことで……言葉と態度、勢い、気合、そして運命、そういう物理的力以外の力によって、晴井先輩に引っ張られて、部室を後にした。

「……オレ、入団面接、副長でさ」
「うん」
「あ、これ玄関横のめちゃめちゃ上手い絵描いた人だ、なんだズルいなイケメンじゃんモテるんだろうなあとか羨ましく思ったんだけど」
「物の怪にだけモテるんだよね。
　中身かなり重度の変態だから」
「『生徒会の氷の女王』と『漫研の欲望ビバンダム』だけでおなかいっぱいなのに、またあんな変なの吸い

寄せた」
「まあ晴井先輩、転入してきた時から目立ちまくってたから、時間の問題だとは思ったけど早かったなー。さっすがオレたちの副長だぜ」
「……一年はいいわよ。アレでまだ。
　私、面接、局長よ？」
「えっ。目黒局長って日本語しゃべれるんですか」
「私将来どんな圧迫面接来ても負けない自信ある。
　あまりにアレだったんで、入団後むりやり説き伏せて、団員面接を副長に換えてもらったんだから。あれじゃ団員入らない」
「まだ副長は絵さえ描いてなければただのイケメンですからね」
「局長はゲージツこさえてないとただのエイリアンだからな……
　そいえば局長どこです？」
「奈良じゃない？」
「また土偶掘りですか……」
「埋まってるのよ、乗ってきた宇宙船が」
「ホント冗談にもなんにも聞こえない」

「……いてて、ちょと痛いッス先輩、そんなに引っ張らなくても逃げませんて」
「いやわからん、気に入った品物買う時は気に入ったそれを手放すな、と中国の諺にある」
「今時中国人でも電器屋行って展示品持って帰ろうとはしませんよ。
　恥ずかしいじゃないですか、まるで恋人どおしのように、しかも神聖なる学内で」
「てめーとオレがこんな歩き方しててそう見るバカが居たらそいつ逸材過ぎるぜ」
「……まあ、そっか」

　ずんずん進む。小柄な先輩はしかし超大股で歩くの速い速い。
　絶対アメリカ人だ。

「……てめーらの部おもしろいな、なんで局長・副長なんだ。新撰組か？」

「そうですよ。テロ集団なんです」
「Really?」
「ええ。ウチの今年のキャッチコピーは
『アートで殺せ
　ひとを　未来を　地球を
　be together be together』」
「ん、ま、そのぐらいが元気があってよろしい」
「当たり前じゃないですか俺たちは『なんとか甲子園』なんか死んでも出ませんよ」
「心意気だけは買おう」
「大人に、権威に認めてもらおうとかイカレてんじゃねぇか！？
　仮にも文化部だろうが！
　誇りを持てよ誇りを！
　おのれのパッションとその発露に！
　15歳が決めようが50歳が決めようが、１点は１点だ！」
「大人が、権威が認めざるをえない作品をブチかましてやる、という考え方もあるぞ」
「……ムムッ。そーれはそう……ですね。

　先輩、只者ではないですね？」
「んなこたないさ。オレはただの……」

　先輩が歩を止めた先に、ドアがある。
　プレートには『ロボット部』。
　親指で指し示す。

「ここの部長さ」

　……こんな部あったっけ？

ロボット部

「……つまりお一人？」
「So イエース」

　ニヤリ、とまた笑った。
　晴井先輩に不躾にも「こんな部ありましたっけ」と問えば「作った」と答えが返ってくる。

　部室は小さく、薄い即席壁で二つに区切られている。いま俺が先輩といるのは六畳ほどで、安っぽいテーブルとパイプ椅子がいくつかある。右手の壁向こうにもう少し小さい区画がある。
　テーブルの上にはノートPCやなにかの基盤みたいなもの、工具、それに書類の束みたいなものがわんさと積まれていて、先輩はそれを腕でエイヤとのけて、差し向かい。

「よく学校が許可しましたね」

「ここゆるいからな。いくばくか金も払った。自由を買うために」
「寄付と言いなさいよ。
　……聞きましたよ、先輩お金持ちだって」
「アホ言え、あっしなんざ『ザ・ヴァレー』じゃ門前小僧程度さ。島一島まるごと買って地元住民から猛反発受けてからが本番だな」
「やっぱ悪いことして稼いだんですか、自慢の頭脳で銀行の口座をクラッキングしたりして」
「なにを人聞きの悪い。ちゃんとしたスタートアップをわけわかってないVC（Vakuchi uChi）に高く売りつけただけさ。ガラクタがいっぱい詰まったドリーム・トイ・ボックス、$200Mで売れてウッハウハ」
「やりますねえ。
　悪いことじゃないですか」
「売り買いは真剣勝負だ、モノ見抜けん方が悪い」
「なんの会社だったんです？」
「ネームプレート見りゃわかっだろ、これで革新的八百屋のアイデア売ってりゃびっくりポンだよ。
　ロボットだ、ロボット。正確にはその頭脳、AI」

「おお！　流行りですね！　食いつきよかったでしょう」
「まあな。さらに正確に言うと
『どんなAIも一瞬で作れる量子プログラミング』
の特許」
「な、なんかわかりませんが、量子とか言い出すと凄そうですね」
「おう凄いぞ、凄すぎて実現できなかった」
「ダメじゃないですか。
　そんなの特許として認められるんですか？」
「特許局の役人に袖の下を」
「マジかー！　そんなことできるんですかぁ！？」
「電話の発明者は誰だ」
「グラハム・ベル！
　クイズ番組風にキャメラを指さしながら」
「あれコネ使って競合相手からほぼ横取りした特許だぞ。知らんか？　この有名な話」
「マジすか。
　でもそれは大昔でしょう、日本人がチョンマゲ結ってるぐらいの」

「いまでも同じだ同じ。たいへんだったんだぞ、どういう組織になっててどういう意思決定がなされているのか、キーマンは誰と誰か物凄い金と時間と人脈使って調べてー」
「その努力をまともなことに使って下さい」
「いや、理屈はオレの頭の中で完成されてるんだ」
「出た、マッドサイエンティストが好みそうなセリフ」
「いやこれはホントに。
　いちからせつめいしないとだめか？」
「せつめいしてもわからないのでだめです」
「まーとりあえず目処はついたんで、知的興味を失って、あとはのんびり余生をパパの国日本に帰って趣味のロボットでも組み立てつつ過ごそうかな、と」
「余生と言うには早いですね、先輩のキャラからして、悪のロボット軍団を作り上げて世界征服でも狙ってるんじゃないですか」
「ふふふ……
　洗ってやる」
「うわあギリギリだ……壁コスってるかもしれない…

…」
「心配するな、ユーは気に入ったからペルシャ猫ロボットにして飼ってやる」
「サー・イエス・サー。
　先輩はいの一番に腹心役ロボットに裏切られて死ぬ博士役ですね」
「オレにはバックアップが三系統あるから大丈夫」
「はいはい」

　あまり冗談には聞こえないところが、キャラクターなのだろう。

「……去勢はされるんですかね」
「なにをもって去勢と言うのかね。タマが無いと言えばそりゃ無いが」
「難しいですね」
「ロボットにおける『子孫を残す』とは何か。あるいはもっとはっきり言えば、ロボットのセックスとは何か」
「うむ、日常の役には立たなそうですが、そういうテ

ーマの方が我々庶民にはおもしろいですね」
「だろ？　やっぱAIつまり脳だけやってるより、『ロボット』の方が夢があるよなー」
「ありますね。ジャイアント馬場も言ってましたよ。総合格闘技がワーッと出てきた時に、『プロレスはなんでもできる。だからプロレスの方がおもしろいんだ』と」
「それはちょっと違う気もする、が。
　ていうかジャイアント馬場て誰」
「今風に言えばレジェンドですよ。
　大レジェンド・プロフェッショナル・レスリング・ラーです」
「無理に英語駆使してくれんでいいぞ。ワシャパピィが日本人なんで、日本語いちおーペラペーラのつもり」
「ご謙遜なさらずとも十二分にネイティブです」

　とても小柄なのはお父上の血かな。
　娘には父親が、息子には母親が、ってよく言うよね。

「今『このたまらなくキュートなボディは父方から受け継いだものかな』と妄想を膨らませただろう」
「それ自体が妄想です」
「ならいい。
　噂ほど助平ではないのだな」
「どんな噂が流通してるんですか」
「さっきも言っただろう、女子という女子を、当たるを幸い投げ飛ばし」
「それじゃちょっとソフトな通り魔じゃないですか」
「現在は二人ほど愛人が居るが決まった本妻は居ない模様。
　ちょっと男前だからって人生舐めてたら婚期逃すぞ。四十で独居はキツい。実家暮らしは実家暮らしでまたキツい」
「だいぶ先の話なんでもう少ししてから考えます。
　ていうかですね。
　出所わかんないですがその噂は春にもランにも失礼なので訂正しておきます。その二人は仲のいい友人ってだけで」

「男と女がフレンドつーたらセックス・フレンドだろう」
「アメリカはフリーセックスの国でしたっけ」
「『I love you.』といえば意味は『一発ヤラせろ』だ」
「とにかく違いますよ、僕がモテ・ボーイだと誤解されるのは嬉しくもあり嬉しくもなしですが、二人に悪いじゃないですか」
「えーとなになに」

　といって先輩はポッケからスマホとメガネを取り出して、スマホを掛けてメガネを見る。

「老眼ですか」
「intelligenceを演出する小道具に決まってるだろ。ブルーライト、レッドライト、グリーンライトを95％オフだ」
「真っ暗じゃないですか。それ意味あんですか」
「マ＃＄＆％・ジョーダンだろ」
「いま固有名詞避けてくださったんですか。ご配慮痛み入ります」

「うっせぇからな、いまな。ニッポンにはJASRACという悪の組織があるらしいな」
「そこだけじゃないんですよ。
　こないだランが日本で著名な『超男』という特撮コンテンツのことがセリフでちょっと触れられている同人誌をネットで発表したらですね」
「超男？　ああ、赤とシルヴァーの」
「それですそれ。
　そしたらその媒体から『そこのプロダクションからヒットマンが来るから頼むから修正してくれ』と泣きつかれたらしいです」
「いかにも日本て感じじゃのー。それが『ソンタク』てヤツか。いくらなんでもそこまではせんだろ」
「わかんないから安全方向に見ておくんですよ。その昔アメリカ映画『星戦争』のファンアートを監督本人に見せたら、
『で、これはロイヤリティ払ってるの？』
と応えた小咄で笑ってたんですが、いつの間にか追い抜いてました。あっはっは」
「……Banksyってartistが居てな。

　知ってるか？」
「俺一応絵描きの端くれなんスけど。
　世界中でゲリラアートを描き殴るイカした覆面絵描きでしょう。描かれた方が壁切り取って保存しちゃうぐらいの。
　知ってるも何も、正体は俺です」
「なら話は早い。ある小学校が各校舎に地元にちなんだ人名をつけて、そのひとつがBanksyと名付けられたってんで奴が返礼に絵を描いて、一緒に手紙も送った。こうある。
『覚えておいて、許可を得るより許しを請うほうが簡単だ、ってことを』」
「いいこと言いますねえ。さすが俺」
「それはそのプロダクションが当人と話す案件だろ。媒体はカンケーねーんじゃないの？」
「いやあ今はヘイトスピーチなりなんなりは垂れ流す方にも責任があるというのが一般的で。twitterが伸び悩んだのもそこを放置したのが一因か、なんて言われてますね」
「twitterやってる？」

「まあ、見る程度ですが。たまに告知はします、部のイベントとか」
「フォロワーは何人？」
「1200ぐらいですかね」
「おいおいそこそこ居るじゃねぇか。多少ツラがマシな程度のしがない高校生が」
「絵はジャンルごとにクラスタがあるんですよ。むしろ俺なんざ少ない方ですね」
「拙者も情報収集にしか使っとらんなあ……確かにあそこのタイムラインが一番早いんだよな」
「なんの話でしたっけ？」
「ああそうだそうだ、ホンダご乱行メモ。えーと……『生徒会副会長と燃えるように熱い焼肉デートの後、夜の街に消える』
『漫研のエースとコミケ前日入りホテル、同じ部屋もちろんダブルにご宿泊』」
「いや、ちょっとお待ちいただきたい。
　それは誤解・六階・大殺界です。
　その二件にはちゃんとした流れというものがあってですね」

「チミの暴れん棒がどんなにやぶから棒でもわっちに何か言う資格も権利も義務もないさ。いやむしろ、そのまろやか棒をちょっ、とお借りしたい」
「人の棒に自由なネーミングをするのは止めて下さい。
　貸せと言われて貸せるもんじゃないですよ、清純な箱入り乙女の先輩はご存じないかもしれませんが、これ取り外しできませんので」
「そのぐらいは知っとるわ。いまネジくるくる回されて『はい』とか渡されても困惑する一方だろうが」
「くるくるくる」
「回すな。
　いや棒だけじゃ困るんだ。
　ぶっちゃけて言うと、セックスをしてもらってもいい」
「はい？
　……誰と？」
「誰とでもいい」
「それでさいぜんから僕にまったく身に覚えのない艶噺をほじくってたんですか。いやだから言ってますよ

うにその二人とは、
『やるかー』
『やるー』
といった間柄ではないので」
「じゃそういう間柄のを呼べ」
「いませんて。
　ていうか目的はなんです！？」
「この部屋見りゃわかっだろ、ロボット研究のためだ！」
「そんなもんAVでも観りゃいいじゃないですか、なんぼでもあるでしょう何からナニまで世界まる見えハウマッチみたいな動画が広大なネットワーク宇宙には溢れんばかりに乱れ咲くほどに」
「画面で真実が理解できるか。
　おまーはなにか、スモウ・レスラー達の力感を迫力を汗だくのモチ肌を、大相撲本場所を現場に観に行かずして感じられるというのかね」
「む。それは確かに……ピカソやゴッホの本物は画集とはまるで別物ですね。
　……えーとつまり、現物をこの目で観たいと」

「ウイ」
「そんなこと俺に頼まんでも、先輩ならいろんなツテか最悪金を使えばなんとでもなりましょう？」
「第三者はダメだ。開発中なのだから、秘密厳守」
「俺はいつ関係者になったんです？」
「北海道は三ヶ月住めば道産子だろう？
　この部室入って三分経てばロボット部員だ」
「ジ・悪徳セミナー」
「そもそもこんなフロンティア・スピリッツに溢れたワクワク冒険イベント、頼めるのはユーを置いて他におるまい！」
「えらい買い被っていただいてますが、してその心は」
「アホで・スケベで・前のめり」
「三つとも否定できんな……」
「これ三つ揃うのは自慢していいよ。アホでスケベだとだいたいクッソ保守的だし、アホで前のめりだとエロくない。他にやることあるからな」
「スケベで前のめりだと？」
「もう死んでる。撃たれるか刺されるか性病で」

「イヤだなあ。
　とにかく、俺の方はまだしもお相手が居ないことにはどうにも……あ、お商売の方とか呼ぶのはダメですよ！」
「そんなことしたらさすがに部がお取り潰しを食らうわい」
「いまでも十分取り潰されそうですけど……困ったな、いや、困らんでええんですけど」
「……しょうがない。
　ワシが一肌脱ごか」
「……」
「なんだその魚が死んだような目はー！
　ワシじゃ不満かこの熟女マニアー！」
「……なんですか、このながーい一連の流れはあれですかつまり新手のナンパですか」
「アホウ、ナンパがしたけりゃ仕込み麻酔銃を使うわい」
「それはナンパとは言いません。
　いやまあしかし先輩、なぜそんなに切羽詰まってるんです？　ロボットの研究ったって、なんといいます

かそのー、そういうところは、最後の最後でよろしいのでは？　むしろ無い方がいろいろな軋轢を生まなくていい気もしたりしなかったり」
「バカモン、人類の文化も文明もエロで駆動されるんだ。
　エロ方面活用可！
　これ以上ロボットを発展させるインセンティブはない！」
「そおかなあ」
「エロビデオ無くしてVHSの興隆は無かったんだぞ。電気屋がデッキ購入してくれたおじさんにそっと1本差し出してだな」
「もーいつの時代の成功体験引きずってるんですかー。いまの高校生VHSとか言っても知りませんて。いいですか、僕21世紀の生まれですよ！」
「嘘！　阪神が優勝してから15年も経って！？」
「なぜ『阪神優勝』ってと85年なんです？　それ以降も優勝してるのに」
「たった一度の日本一だからに決まっとるだろう」
「ああなるほど」

「あれからもうそんな経つのか……バックスクリーン三連発、バース・掛布・岡田……役者も揃ってたな、真弓、平田、中西そしてムッシュ吉田……」
「いつまでも過ぎ去った甘い夢にすがりついてては、素敵なロボットは作れませんよ？」
「バーロー、ロボットは夢だ」

　それは確かに。

「……まあ、まずはとりあえず、現状を見てもらおうか」
「お」
「……誰にも言わないって、約束できる？」
「先輩クネクネしてると美少女ですね」
「常時美少女だこのハゲチョロビンがー」
「了解です、約束しましょう」
「言ったらその瞬間静脈にナノマシンが注入されて」
「三日後、誰にも死因がわからないように死にますか」
「ずっと奥歯に物が挟まった感じがする。一生」

「ぜったい誰にも言いません」
「ようし」

　先輩は勢い良く立ち上がると、右手の壁の一部に掛かっていたカーテンを開ける。あ、ガラスの窓がある。
　あっ、これもしかして。

「ヘイカモン・マジックミラー・ゴー！」
「……おおっ！？」

　壁のスイッチを入れると、向こうの部屋が明るくなって、窓から様子が見える。そこに座っているのは……

「……先輩？」
「どうだ、なかなかのもんだろ」

　遠目には、寸分変わらない。まばたきをせず顔が固まったままだから人形とわかる。しかし巷のニュース

に出てくるアンドロイドにある、いわゆる「不気味の谷」は感じられない。俺は思わず腰を浮かせた。

「……これはすごい……」
「ああだめだめ、踊り子さんには手を触れない」
「いや、もうちょっとだけ近く」
「だめだめだめだめだめ。粗が見えるから」
「ちえー。
　いやでも見てくれは凄いですね、先輩ちょっとそこ立って黙って微動だにしない、とかできます？」
「……こうか……」

　全身至る所ぷるぷる動いてる。

「多動症過ぎます」
「しゃべるな動くなと言われて小学校をドロップアウトしてな……以降エジソンやアインシュタインのように独学だ」
「ええように言いますね。
　いやしかし立派なもんだ。がぜん先輩のこと見直し

ましたよ」
「まー物理面はダッチワイフ屋さんに頼んだんだけどな」
「なぁんだ。いやラブドール屋さんと言ってあげて下さい。オリエンタル工業？」
「Sure.　宇宙最強の人形師集団だ」
「これが……動く。それはいいなあ。
　ちょっとどこか動かしてみてくださいよ」
「いままだ整備中なので、また今度な」
「そんなこと言って、実は中身ぜんぜんできてないでしょ」
「フン、そんなツッコミは想定内。
　Hey Dyna2，１たす１は？」
『に』
「……」
「……」
「えっ、腹話術ですよね？」
「ちゃうわ」
「ホントかなあ……だって唇も動いてないように見えるし……

　ヘイ！　ディナツー！　国民的アニメ『セレブリティ♪ピューリタン』第43話でピュー・リッチが戦った相手は？」
『……クレイジーメイフラワー』
「……は、クレイジーメイフラワーですが、そのＣＶ」
『……イノガシラユウジ』
「……は、井之頭雄二さんですが、井之頭さんが所属しているサウンドグループ」
『……』
「……は！」
『ドイツ・ドドイツ』
「凄い。本物だ」
「フー。お手柔らかに頼むぜ、AIの処理がおっつかん」
「先輩いまスマホ弄ってませんでしたか！？」
「細かいことにうるさい男だなー、モテんぞ！」
「先輩は俺をモテさせたいんですかモテさせたくないんですか」
「実験に協力してくれりゃそれでいい」

「要するにつまり、このディナツーちゃんを横倒しにして上に乗ってヘコヘコ腰を振れ、と」
「あらためて言われるとそれなんかイヤだなあ。目の前でそれが行われるのは、なんかほんとうにイヤ」
「じゃあ呼ばないでくださいよ！　俺だってヤですよ！」
「んー、いいアイデアだと思ったんだけどな……」
「俺にはさほどいいアイデアには思えませんがねぇ」
「よしわかった、煮詰まったら『書を捨てよ町へ出よう』とシュージー寺山も言っている。
　おい、街へ出てテキトーな女ナンパしてホテルへ連れ込め。ついてって撮影するから」
「どんなトウの立った変態カップルのプレイなんですか。
　ヤですよ！　俺は好いた女でなきゃ手も握れません」
「さっきお前俺の手を握りしめていただろう」
「先輩が、大好きなんですよ」
「とりあえず街をうろつきゃアイデアも出るだろ。
　おい、行くぞ」

「人のボケは全スルーですか。
　付き合わんでもないですが、その『おい！おい！』言うの止めてくださいな。若手社員飲み屋に引っ張るオッサン社員みたいですよ」
「じゃーどー呼びゃーいーんだよー」
「なにスネてんですか。名前でいいじゃないですか、『本田クン、さあ行きましょう』
とこう」
「My Little Honda, Start your engine.
　ブルンブルーーーン！」
「わ」

　背中に乗られた。軽いな先輩。

「エンゲージ！」
「へいへい。
　先輩ちゃんと飯喰ってますか？　軽すぎますよ」
「ギークは食生活は不健康っての相場だろ」
「いまはヴィーガンとか流行ってんじゃないんですかー？」

「それを不健康ってんだよ。
　おらぁ喰ってるぜ、真夜中三時にとんこつラーメン替え玉バリカタで」
「それは止めた方がいいッス」
「あれ絶対アメリカでも売れるぜ」
「もういっぱい行ってますよいろんなラーメン屋が！先輩ホントにアメリカ人ですか？」
「知るか。コスモポリタンだ」
「パスポートがあるでしょうパスポートが」
「どこにしまったかな……」
「どうやって入国したんですか、貨物船の船倉ですか」
「横田からだよ。基地まで軍の輸送機で、あとヘリで東京ヘリポートまで送ってもらうコース。フリーパス」
「基地までは百歩譲るとして、そこから出るなら入管というかパスポートコントロールあるでしょう？」
「ねえよ。
　日本が独立国だとでも思ってんのか？」
「ありゃー」

「人の背中って意外に乗り心地がいいな。
　ホンダ、愛車に雇ってやってもいいぞ」
「月50万ぐらいお手当あります？」
「おれのおっぱいが押し付けられ放題」
「おつ・ぱい？　ブラウスのゴワゴワしか感じませんよ？
　つーか軽くカップ入りのブラぐらい付けてくださいよ妙齢の女子なんだからー」
「人を騙せるような図太い神経の持ち主じゃないんだ」
「さっきVC騙したって言ってたじゃないですか」
「騙したんじゃない、相手が勝手に夢を見たんだ。
　ひとの夢、壊しちゃ可哀想だろ？」
「で、お手当は」
「ガッコ着いたらカフェオレ一本」
「ケチ！」
「ロボット開発は金が掛かるんだ！　締めるところは締める！　放漫なところは放漫！」
「それを放漫っていうんです」

「……いま通ってったの、副長と……妖怪？」
「こなきじじい、かな？」
「あの人絶対お祓い行った方がいいと思うんだ……」
「そこで巫女さんに惚れられるんだよ、三十六重人格ぐらいの」
「あるいは狐の変身したやつな。800歳ぐらいのロリババア妖怪」
「うええ、ありそう」
「で、チクりに行くの誰？」
「おれ生徒会！　副会長のゲジゲジ見るようなつめたーい目で
『で？』
って言われたい！　ああ背中がゾクゾクしますッ！」
「あたし漫研行ってくる、鈴木さんの目ほんとにマンガみたいに泳ぐの！
『ふ、ふ～ん……』
ってバタフライで！　おもしろいよ～」
「局長のお耳には入れなくていいのだろうか」
「だいじょうぶよ、わかったらわかるしわからなけれ

ばわからないから」
「でも人にオモチャ盗られると、血……の色の絵の具が降るよ」
「それもまたよし！　忘れたのかお前ら！　俺たちが何部か言ってみろ！」
「機関部！」「人事部ー」「チャンピオンシップかっこ二部相当」「コマンタレブー」
「バカ者共め、俺たちは、
『びずつぶ』
だ」
「言えてねぇ……」
「この言葉言おうとすると口が歪むんだよな」
「わたしら禁呪か」
「『ひまつ部す』……ほんとだ言えない」
「ぶづづぶ」
「ぴじつぶ」
「じじぶつ」
「じゅびじゅべばー」……

大本店

　――もちろん校門を出たところで背中からは降りてもらって（お姫様だっこを要求されたがスルーするー）てくてく歩いてたどり着いたのは駅前巨大イカした商業ビル。
「商業ビル」ていつの表現か。
　しかし他の言い方はあるまい。セロハンテープやステープラーなどと非商標な言い方されると戸惑うようなもんさ。ファッショナブルなお店がいっぱい詰まった夢の玉手箱である。
「ファッショナブル」て。
「夢の玉手箱」もどうかなあ。

「……なに一人でによによ笑ってんだ？　おもろい妄想ならおれも参加させろ」
「こんな楽しい妄想、独り占めするに限りますよ」
「気になるなあ」

　先輩はなにやら腕に絡みついて頭突きをかましてくる。身長差があるので普通にチンにヒットする。当たりどころが悪いと脳震盪……は起こさんか。
　目的は６階にある巨大本屋、その名も『大本店』。

「……先輩、本屋さんなんて来るんですね」
「貴様はアホウか。だいじなことはみんな本から学ぶんだ」
「いやもうネットからなんでも」
「なんも無いわあんなとこ」
「そうなんですか？　ITや学術の世界は一番相性が良さそうな」
「いやもちろん便利なことも多々あるさ。速報とかサマリーとか。けどまあ、そういうのもだいたいは口コミでパッと入ってくるしな。メールとかチャットとかメッセージで」
「そんなもんなんですか」
「情報ってのはおぜぜと同じで価値がある。んで、バラ撒くと友達連れて戻ってくるのよ。だからバラ撒く。

　という考え方もあるし、単純にお人好しだったり、あと生まれついて『先生』つまり教師ってタイプも多いんで、教えたがり一言言いたがりも居るね」
「最先端の研究なんかもうぜんぶネットで完結してるのかと思ってましたよ」
「国会図書館の閉架書庫を検索することも日常茶飯事さ。人間、金が取れる情報からは、金を取ろうとするだろう？」
「確かに」

　言いながら先輩は俺にカゴをもたせ、めぼしい本をズボズボ入れていく。おなじみ駆け足のような大股スタスタ歩きで書店中をくまなく回って次々に。瞬く間にカゴから溢れんばかりに。
　……本って重いよね。

「せ、先輩、そろそろ一通り目を通してみませんか。重くて、もう」
「あにー！　おまー男だろ！　こんくらいしっかり持たんかー！」

「ジェ、ジェンダー差別」
「うるせえ。まーしょーがない、喫茶コーナー行くぞ。奢っちゃる」
「わーい」

　子供か。
　先輩は慣れた足取りで喫茶コーナーにするりと乗り込み、椅子にどっかと座るやカゴから一番上の本を取り出して目を通しだす。
　目次をツーと見た後、気になったページっぽいところをズバッと開いてはパラ・パラ・パラとめくって……はい次。

「……プロだ」
「プロだよ」
「全部読まないんですね」
「本なんてなものはな、ピンとくる文言が一行書いてりゃめっけもんなんだぜ。読書はそれを探す作業だ」
「ちなみにこの『ちいさなおうちの建て方』には何が書いてありましたか」

「不規則多角形の家は居心地がいいそうだ」
「あー、それ聞いたことあります。俺の叔父さんの知り合いの知り合いにモンゴル人が居て」
「ふむ」

　先輩は次の本、『super心臓を作る』から目を上げて俺を観た。
　ギラッと光る上目遣いは、女子の媚など1ミリも無い、完成品を検査する職人のそれだ。

「普段パオ？　ゲル？　に住んでるもんだから都会来てホテルとか泊まるとイヤなんですって。四角い空間が息苦しいとか言って」
「ああ。あのテント、居心地良さそうだもんな」
「ウランバートルでも普通にゲルに住んてる人いっぱいいるそうですよ。人がガウディの建築に心惹かれるのも、あのぐにゃぐにゃしてるのがいいんじゃないですかねえ」
「案外そんなもんかもしれんな」

　先輩が4冊目の本をパタリ、と置いた頃、喫茶担当書店員さんがフロートオン・メロンソーダを持ってきた。
　フロート？　そんなメニューあったっけかな、と卓上のリストを見ると無い。スペッシャルが何も言わずに出てくる常連さん、憧れるなあ。

「お連れ様、ご注文は？」
「抹茶キャラメルフラペチーノ、フロート2ショット追加で」
「ホットでいいよ」
「クスッ。かしこまりました」
「……冗談の通じん店だ」
「豚玉といえば豚玉持ってくるぞ」
「先輩は上客過ぎる」
「アイスはメニューにあんだから載せろというぐらいはいいだろお。
　あれ、てめー本は読まんのか。本ダのくせに。
　アッハッハッ・ナイスジョーク！」
「どう反応すりゃいいんですか。

　それよりここ来てからこの一連の流れの中で、どのようにすれば俺の希望の本をピックアップできるのか教えていただきたい」
「ついて回る間に拾えばよかろう。何を言うとるのだ」
「本というのはじっくり選ぶもので」
「だから選んどるではないか」
「立ち読みならぬ座り読みじゃないですか」
「ふん」

　アイスをちょいちょいつついてソーダに溶かして飲む。やったなあ、子供の頃。

「なんだそのじっと見つめる熱視線は。可愛い10歳児だとでも思ってるんだろう、ペドフィリアめ」
「思ってませんって。俺は人の飲み物食い物の趣味に口を出すほど暇じゃありませんよ」
「ここのソーダうまいんだよ。アメリカのっぽい」
「へえ。あ、そういやペッパー・ケイブもありますよね。珍しい」

「ジンジャーエールも直輸入品だ。担当がちょっと凝ってるんだろ」
「向かいのビルの大型書店にはスタバ入ってますからね。対抗するにはちょっと毛並み変えないと」
「スタバたいして美味くないのに混んでんだよなあ」
「あそこは喫茶というより場所貸し業ですからね。ラテはともかく食い物イマイチですよね」
「ディスプレイがカッコイイから美味いのかな、と思ってついついスコーンとか頼んでパッサパサでさぁ」
「あれディスプレイでむしろ損してますよ。学校の購買みたいにパンの配送用プラケースに無造作に放り出してたら、こんなもんかな、と思うのに」
「それだと値段が100円しか取れんだろ」
「あ、そか」
「お商売は難しいわよん」
「俺にゃ無理ッス」
「そうかね？」

　いつの間にか掛けてたメガネをクッと下げて裸眼をこちらに向ける。新聞読んでる途中のおばあちゃんの

ような……

「老眼ですか」
「まずい。遠近の焦点合わせに時間がかかるように……
　ちゃうわい。おしゃれメガネだとさっきから言うとるだろう」
「いや新しいボケがいただけるかなと期待して……
ん？」

　先輩は人差し指をちょん、と一瞬唇に当てた。
　黙れ？
　……よく見ればそのメガネ、「つる」がわりと太くて、先輩はヒンジのところに時折指を当ててちょん、ちょんと。
　あ！　あれか、ウェアラブルなんとかでカメラかなにかが！？
　囁く。

『……デジタル万引きですか』

『人聞きの悪いことを言うな。こっそり写真撮ってるだけだ。なにげない日常のワン・ショットを』
『犯罪者ー』
『月何十万この本屋に落としてると思ってるんだ。買うか買うまいか悩む何冊かの何ページかぐらいいいだろう、サービスしとけ』
『しかしですねお客様』
『ぜんぶこの場でAmazonされたいか！』
『ひーん』
『……よし終わり。
　心配するな、念のため保存しとくだけで、どうせ見んから実害はない』
『そんなエロ本の違法ダウンロードみたいな誰に向かって言ってるのかわからない言い訳しないでください』

　ふー、と二人して椅子に伸びをして、ドリンクを手にする。
　話題を変えた。

「……俺、商売人に向いてそうです？」
「まあ、堅実にやればイケんじゃないの？」
「理由、とかあります？」
「合理的だからな。さっきから今まで見てきた感じでは」
「なるほど」
「むしろ芸術家に向いてねー」
「がひーん」
「金勘定は冷徹なので、月締めの数字が黒なら持続可能性があるし、赤が続くなら終わりだ。だから黒を続けるようにする。それだけだ」
「そうですね」
「商売というと儲けることを考える輩が多いのだが、だいじなのはここの収支だ。自分の生活状況に合わせて納得行く黒が出続けるのであれば、商材がなんであろうとどんな業態だろうと成立する。相手も立地も関係ない。もうちょっと言えば、利益率や売上高も関係ない」
「確かに」
「だから『商店街にひとつ空き店舗が出たから一丁た

こ焼き屋でもやるか』はダメ。だいたい商店街にはすでにたこ焼き屋があるので、そこから客を奪うには相当の差別化が必要だ。しかし、たこ焼きという商材は差がつけにくい」
「はい」
「逆にお豆腐屋さんが高齢で引退するから引き継ぐ、なら芽があるな」
「お得意逃さないように先代の味を引き継がなきゃいけませんね」
「そう。
　売上はたいしたことないがあらゆる初期投資がゼロなんだから、こんな『おいしい』商売もそう無いぞ」
「まあしかし若者はお豆腐屋のクルマのレプリカには乗りたくても、お豆腐屋にはなかなかなりたくないもんですよ」
「金を儲けてから次のこと考えりゃいいだろう。支店を出すもよし、惣菜や揚げ物に進出するもよし。テンプスタッフやアート引越センターの成功物語をまず読め」
「若者はなんかもっとITとかそんなんで長者になりた

いんですよ」
「ふん。
　というような感じで、お前さんはどうしても明日からお豆腐屋をやれ、と言われればやりそうだからな」
「どうしてもと言われればやらなくもないですよ。
　だってどうしても、なんでしょう？」
「そうだ。
　どうしても、だ」
「じゃあ、やりますよ。峠を上り下りして配達します」
「それは要らん。あんたはクルマの運転は致命的にヘタくさい」
「そんなことはないですよ何言ってるんですか、ぼかぁF1の中継をtwitterのタイムラインでテキスト追うだけでまざまざと想像できる男ですよ」
「その有料中継の観れない貧乏学生の日常とドライヴィング・テクニックの間にどんな相関関係があるんだ」
「イメージする力、ですよ」

　フンス。
　鼻息よ、嵐となって吹き荒れよ。

「君か、噂の数学の教科書でイケる男っていうのは」
「微分記号の曲線を目でなぞるだけで脳汁がピンク色に染まります」
「もういい。
　で、経済っていうのはだな」
「下に→書いてあるのがまた床でスタンバってるディルドーみたいでエロティックですよね」
「本屋でそんな単語大声で叫ぶな」
「小声でイヤラシク呟いてますよ。
　これでもartist向きじゃないってのか！」
「向いてないだろどう考えても！」
「先輩そんな言いがかりをつけて俺を国際なんとかチームのエージェントにスカウトしようとしたって無駄ですよ。俺には夢があるんです」
「どうせ大平原のちいさな家でこじんまり生きたいとかそんなビンボ臭い夢だろ。日本のインテリはどうしてこうイジケてるんだ」

「菅原道真の……いや長屋王の……いやヤマトタケルの頃からですね、
『がんばってるのに報われない』
は日本の男子の憧れの生き方のひとつでして。義経とか」
「なんだそりゃ」
「がんばって報われた人は報われたからいいんです。
　がんばってなくて報われない人は当然だからいいんです。
　がんばってるのに報われない、これが人の世の無常、そうすなわち仏教的無常観。
　カモン！兼好法師！イエス！ヘルス・クレリック！」
「がんばってなくて報われる人は？」
「うーん……実は庶民派ヒーローのセンターラインにわりとあるんですよねそれもね。植木等の無責任男とか。それとセットかなあ。そういえば『とんでもラッキーマン』はおもしろいなあ」
「原因と結果がネジくれてるところに運命の神秘を観るのかもしれんな」

「そうかもしれません。
　いや別にちいさな家には住みませんよ。きょうび持ち家ってだけで人も羨む富裕層です。
　そういや僕に金満の相が出てる、って話でしたっけ」
「堅実な商売ならできそうだ、ってだけだ。
　おい本田、『経済』って、なんだかわかるか」
「その『おい』から始まる問いかけ方式、昭和のおっさん臭いから止めて下さいってば。しかもまた大雑把な質問だし。
　えーっと……
　お金の流れ、ですかね」
「ブブー。
　たとえば君が放課後、ボランティアで子どもたちに絵を教えに行って公民館で楽しくみんなでお絵描きをする。これも立派な経済活動だ。金は一銭たりとて動かん」
「そうなんですか。
　うーん……人間の流れ？　動き？　のことですか？」

「近づいた。
　うん、じゃあ、人間は、なんで動くと思う？」
「あわかった、逆だ。
　金だ、金が人間を動かすことを経済という。あ、違うか、金でなくてもいいので、なにかが人間を動かす、その様子」
「まあ、そんなとこだ。
　ここに『インセンティブ』、訳すと『動機づけ』っていう便利な言葉があるので、その『なにか』をインセンティブと呼べばいい。
　経済とはインセンティブが人間を動かす様子のこと。経済学は……もちろん全部ではなくその一部だが、そのインセンティブと人間の関係を研究する学問」
「わかったような、わからんような」
「まあ、だいたいそれは金なので、というか資本主義社会っていうのは金がほとんどのインセンティブに変換できる便利な媒介物になってくれてる、ってことになってるので、ざっくり金だと考えていい」
「つまり『人間がお金を動かしている』のではなく

て、『お金が人間を動かしてる』と。
　……身も蓋もないですね」
「だがそう考えると辻褄が合う、ってか納得いくことって多いぞ。この見方、友達の経済学者に教えてもらったんだが、随分と蒙が啓かれた」
「いやまあ、そりゃそうなんでしょうけど……抵抗ありますねぇ」
「だから金って言葉じゃなくインセンティブって言葉を使えばいい。人間を駆動する『何か』があって、その何かを考察すれば、だいたいの行動原理は理解できる。
　さっきのボランティアの例で言えば、まあ君が腕を見せつけたいとか、むしろ子どもの自由な発想から盗みたいとか、モテたいとか」
「そんなに無理矢理ロリコンに仕立てあげなくても、俺は先輩をちゃんとレデーとして見てますよ」
「とにかく、最近なんか意味がわからなくてモヤモヤしたことないか。ズバッと解剖してしんぜよう。
　これなんのためにこんなことするんだこいつ、みたいな」

「うーん……」

　珈琲を啜る。また美味い。意外に穴場だなここ。お客様へのサーヴィスってことで、利益度外視で良い豆使ってんのかもしれない。

「……ああそうだ、えーっと、しょうもない話なんですけどね」
「しょうもない話にこそだいたい真実があるんだ」
「こないだある物書きが沖縄へ行って、基地とかヘリパッドとか、揉めてる場所を見て回ったんですよ」
「ほいな。沖縄は大変だな」
「はい。で、その顛末を記事にして結語が、
『今まで何も知らずに適当なこと言ってきてすいませんでした。これからはもっとちゃんと調べて書きます』
　もう右も左も『なんじゃそりゃ』の大合唱ですよ。そんなこと最初からわかりきってることじゃないですか。オナニーエッセーなら手元のポストイットにでも書き留めとけ、と」

「そいつ、物書きと言ったが作家か？」
「や、最近よく居る著述家っていうか、ライト思想書みたいな新書何冊か出して、あとウェブ媒体の主宰とか」
「それだ。
　ウェブ媒体ってことは購読者から銭を取る方式じゃなくて、広告収入タイプだろう？」
「ページ見たことないですけどそうでしょうね」
「じゃそいつに金を出してるのは誰だ」
「……広告主、ですね」
「それ。
　その文章は、広告主に対して『もう私は政治的にセンシティブな話題は取り上げません、ごめんなさい』という反省文というか宣言文というか始末書」
「は？
　読者に向けて書いたもの、じゃないんですか？」
「ナイーブな青少年よ、そんなことでは生き馬の目を抜くこの戦場で身ぐるみ剥がされて凍死するぞ。
　広告出稿するのは商売人だろ。商売人には政治的思想信条は大敵だ。歯磨き粉はチェ・ゲバラからトラン

プ大統領までみんな使うんだからな。だからもう、ウチの媒体はそんな話題には触れないからいっぱい広告出してね、と」
「……それだけ？」
「それだけ。
　カンタンだろ？」
「なんだー！」

　大声上げそうになってガマンした。
　たしかにスッキリはする。

「牡蠣に当たった時の下痢が出尽くしたみたいな感じです」
「おれ一応レデーとして見てくれてんじゃないのか。
　ともかく、その件に限らず、マスコミというのは基本的に広告業なんだ。もちろん志あるジャーナリストもたくさん居るが、それらが発表するプラットフォーム、つまり媒体は『媒体』、メディアって言葉通り、価値観に対しては本来ニュートラルなもので」
「不偏不党ってのはそれを指すんですか」

「そう。
　基本的に触らない、触る時はどの意見をお持ちの方でもご覧になれますよう叙述する。
『マスゴミは政府の犬だ』なんて揶揄があるが、だから政府が言う事なら自分たちに責任が無いので垂れ流してるだけ。別に媚びてるわけじゃない。売れりゃなんでもいいんだ、政府批判で売れりゃそうする」
「うーん」
「だからまだ購読料が主な収入源の新聞の方が若干マシなんだ。逆にＴＶの民放なんて収入は広告以外無いんだから、視聴者が観たい情報が流れてくると考えるほうがおかしい。金出してるのは広告主だからな」
「でも一応はたくさん観られた方が広告主が喜ぶわけでしょう。同じ枠買ってたら視聴率がいい方が」
「チミは卑しくも絵なぞ嗜んどるくせに『ウケるものがイイもの』とか思い込んどるのかね」
「違いますね」
「そういうこった」

　淡々たる表情でソーダをちゅーっと吸い上げる先

輩。
　まあ高い方にサバ読んで10歳だな。

「てことは、相手のインセンティブを見抜く、てのがだいじですね」
「うん。
　ほれ、貴様のスマーフォトンはiPhoneかね」
「そうですね。先輩のは……見たこと無いモデルですね、どこのです？」
「知り合いに試作機貰った。OSはAndroidだ。
　AppleとGoogleはこれこのように同じような商売をしてるようでいて、まるで違うビジネス・モデルだ」
「というと？」
「Appleは電機メーカーで、Googleは広告代理店だ。
　前者はこの機械を売って儲け、後者はこれで観られる画面を管理することでそこに広告を掲載し、広告主から金を取る」
「そうか、そうですね」
「だからこのまったく同じように見えるものに対して、両者の取り組み方はまるで違う。

Appleはモノとしての魅力を最大限に高めるためデザインや素材などに注力し、Googleはとにかくずっと画面を観てもらうためにさまざまな便利サーヴィスをタダで提供する。当然、Appleの機械だろうが画面が自分のものであればいいので、iPhone向けのアプリやサーヴィスも開発する。言い換えれば、ＴＶやラジオや新聞を、そのプラットフォームごと開発してる会社とも言えよう」
「ソフトウェア屋さん、じゃないんですね」
「それはMicrosoftだ。MSはソフト、ＯＳを売る会社だ。最近はサーヴィスも多いが。なので、スマホのビジネスでは、ＯＳの代金をハードにオンできるApple、広告媒体運営費と考えることができるGoogleに比べ分が悪い。これがWindows Phoneがダメだった理屈だな」
「後発だからアプリが揃ってない、とか機種が少ない、という理由でもないんですね」
「それはニワトリタマゴなので、どちらかというと結果だな。スマホＯＳタダでバラ撒くならGoogleと喧嘩、ハードウェアも自前でやるならAppleと喧嘩、どち

らにしても今からだと茨の道だ」
「しかし奴らはゲーム機ビジネスで任天堂とソニーの牙城に見事割って入った連中ですよ。俺達のセガにできなかったことをやってのけた」
「ゲーム機ビジネスは三社とも同じスタイルじゃないか。だから資本力つまり手持ち現金実弾のボリュームがモノを言ったんだ。
　新聞眺めてるといまだに『スマホＯＳシェア』とか完全に意味のない数字出して紙面埋めてる無能が居るが、すぐクビにすべきだ」
「そうですね、東芝と電通を比べてるようなもんですもんね。
　でもね、そういう数字好きなおっさんが多いんですよ」
「そんなことやっとるから滅びかけとるんだろうがこの国が。数字追うのはいいが意味のある数字を眺めろよ」
「ぜひ先輩が弁慶の泣き所あたりを革靴の先で蹴ってくださいな」
「革靴の先がもったいないからやらんわ。

　Googleはその点いつもCoolで、ソフトウェアを開発するのは広告プラットフォームになるかならんかその一点だ。だから、そうならないならＲＳＳリーダみたいな現実に多くの人が便利に使っててかつたいして開発パワーも食わないものも、スッパリ切る」
「ＲＳＳリーダって、なんです？」
「ああもう知らん子も多いか。えー広告まみれのwebから、記事本文だけ抜き出してきて、適切に並べて読みやすくしてくれるアプリ、と言おう」
「ああ、そりゃ本質的に合ってませんね」
「だから、検索にGmailにGoogle Maps、無料でいろんなもの使わせてくれてとても親切に見えるGoogleはしかし、広告代理業まわり、つまり金儲けについては極めて厳しいぞ。
　GoogleAdSenseって知ってるか？」
「アド、ってことは広告ですか？」
「そう。個人が自分のwebページやブログに、Googleが用意した広告バナーを貼るんだ。そうすると中身はGoogleが勝手に選んで表示してくれる。webページの内容に合ってたり、あるいは読者が気になってるネタ

をな。そうすると広告をクリックしてくれる確率も上がるだろ。そうなると広告主からの収入も増え、貼った個人へのバックマージンも増える。同種他社の広告の10倍ぐらい儲かる、と言われている」
「？？？」
「例を出そう。お前が同人誌を作ったとして、Googleに申請したら『このピザの広告を折り込んで下さい』とチラシが送られてくる。それを同人誌に挟んで配布する。中にはそのチラシを持ってピザ屋さんに行き買う人も居るだろう。そのチラシには番号が振ってあって、君が配布したものだとわかるんだ。だからピザ屋からGoogleを経由して、君に広告費として少しお小遣いが支払われる」
「いいですねそのサービス」
「その代わり、不正はダメだ。具体的には、『この広告でピザを注文してくれると僕は助かります』と明言したり、あるいはもっと露骨に、自分でピザを注文したり」
「んー、まあ、そりゃそうなりますね。広告は、無垢な人に見せたいわけだから」

「ということは逆に、巧く騙せれば、すなわち、何も知らずにホームページに来てくれた人が、自然にクリックしてくれたように装うことができれば？」
「自分で広告見て自分に収入が入る。
　おっ、やりましたか、さすがハッカー」
「やったさ。
　まー本気ではないが半日ぐらいかけてちょいと凝ったスクリプトを組んだ。収集した各種情報を元にロボット騙せそうなヤツを」
「結果は？
　毎日100万ダラーが振り込まれてウッハウハ？」
「おうさ、順調に稼げてたんだが、さて初めての支払いが発生する、という一月後に垢バンだ。突然、AdSenseの個人ページが見れなくなってやんの」
「うわー」
「裁判なし言い訳無用の一発アウト、テロリストより酷い扱いだぜ。それも One Out, Forever Out だ。オレはもう一生、GoogleAdSenseをやれん」
「厳しいですね！　言い分ぐらいは聞いてもいいですよね。

　いや、というか、俺ならむしろ」
「そういうヤツは、そのプラットフォーム使って儲けようとするヤツ、ということは、広告露出を最大化してくれる強い味方にもなってくれそう、だよな」
「そうそう、それです。
　今までのには目を瞑るから、これから真面目にやるなら今度ばかりは許してやる」
「オレも、もしバレてもまずそんな風にクッションあるかな、と思ってたら即オミットだ。
　まーこの件はルール違反、自分が悪いんで詰るつもりも責めるつもりもないがな」
「ちょっともったいない気がしますね」
「だろー。
　だからこの辺がアメリカン・ビジネスの最先端というか……
　おい、『パレートの法則』って知ってるか」
「なんですそれは」
「『働き蟻が８割でサボり蟻が２割』とか聞いたことないか。世の中はそういう風に８割２割でできている」

「なんかそれは聞いたことありますね」
「接客でいうと、８割の客は普通の客で、２割の客がややこしい客で、サポートコストはその２割の客が８割持っていくので、つまりこの２割の客を切り捨てれば、サポートコストは２割で済む」
「そうカンタンに行くもんですかねぇ」
「本当にそう行ってるかどうかはわからんが、とにかくそのように行動すると、大幅な効率化が図れる、と考えるわけだな」
「ゆくゆくは戦力や上客になりそうでも？　だいたい、富裕層はうるさい客ですよ？」
「そうだな。
　最初にフィルタに掛かったらもう捨てる。
　言い換えれば、最初のフィルタ、ハードルをかなり高めに設定する」
「いや絶対それはなにかおかしい気がするな。
　フィルタに掛かってる方を拾うぐらいでちょうどいいんじゃないですかね」
「だよなー。
　まあでもぞっとしたぜ、Google様に嫌われてGmail

ならまだしも、例えば検索システム使えなくなったら商売あがったりだ」
「でもそれ全部紐付けられてるわけだから、なにからなにまでバレてるわけですよね。このGmailはあの寸借詐欺野郎のアカウントだ、って」
「イエース」
「コワーーーー！
　現代社会ちょお怖ぇええーーー！」
「極端な話、AppleとGoogleに嫌われたらスマホ持てんぞ。中古屋でパカパカ開くヤツ買ってきて寂しくカパカパ開くしか無い。あるいはSHARPのくるくる回るヤツ買ってきてくるくる回す」
「ワンセグのアンテナシュッと伸ばしてね。
　いやまだ現行機ありますって。ガラケー」
「中身Androidだっつーの」
「あーそうだったー！
　……しかし、先輩みたいな天才でも騙せないんですね」
「だいたい悪いこと考える奴は思考回路が同じだからな。慣れてる担当がログ見りゃバレるんだろう。ある

いはここにこそAIを使う」
「脱税の手口なんかも、税務署の人にはだいたいバレバレらしいですね」
「こっちは初犯で向こうは毎年毎年何百何千と相手してるわけだからな。
　だから、Googleの真の花形部門は検索でもAIでも自動運転でもない、広告出稿・配信システムの構築と、精密無比なそいつを維持管理してる連中だ」
「お金稼いでくれる人がいちばん偉いですもんね」
「あたいもこういう研究やってんで、やっぱGoogleには一目置いてんだけど、なんか憑き物が落ちた感じ。別にくさしてるわけじゃないんだけど、ああそうかそういうことか、と」
「自動運転なんかまさに広告媒体ですよね。
『OK Google、近くの駐車場に空きのあるファミレスを教えて？』
とかそういう時代になったら、そのファミレスが広告出さないわけにいきませんね」
「そういうこったな」

　先輩はわずかに残ったソーダをズッ、と啜った。

「東芝やSHARPで思い出しましたが、日本経済ってどうなるでしょうね。なんかこー、いつまでも上向かないですね」
「見てくれは超低成長ながら平穏だが、国債はおそろしく膨らんでるからな」
「借金って、いつか返さないといけないものでしょう？　なんか『日銀は政府の一部だからいいんだ』なんて言説を読んだことあるんですが、どうも信じられない」
「オレの友人に経済の専門家が三人居る。
　一人は大ヴェテラン経営コンサルタント、元JICAで海外経験も長い。も一人は東大教授。経済学の著書で賞も取ってる。三人目は政府系金融機関の久留米支店長。金融庁に出向経験もある」
「いずれ劣らぬ経済最前線の戦士たちですね。頼りになるなあ」
「『どうなる日本経済』と問えば、三人揃って『わからない』と返ってきた」

「頼りにならんなあ」
「ふ、つ、う。こんなことになる前にクラッシュするんだ。借金の額がかさめば、周りは返せなくなると思うのが当然だからな」
「そうですね」
「しかし『とは言っても他の国や金融商品より安心』とか、『ここまでボリュームが大きいと潰せないだろう』とか、合理的には無根拠な『気分』みたいなものが支えてる感じだな」
「怖いですねえ」
「まあ貨幣というのは突き詰めて言えば信用そのもの、つまり気分の代替品なので、どれだけ背後に借金抱えてようと気分が毀損されなければ流通しつづけるさ」
「そんな投げやりな。クラッシュが来たら困るのは庶民ではないですか」
「その政権を支持してるのが庶民なんだから仕方なかろう。日本人の大好きな自己責任だ」
「そうは言ってもですね」
「インセンティブで考えろ。時の政権はバラマキでも

なんでもして景気を煽って気分が高揚すれば支持率は上がる。支持率以外に政治家の行動を駆動するインセンティブはない」
「でも老人が支持しているんですよこの政策。意味わかんない。デフレでお金の価値が高い方がいいでしょう、年金生活者や貯金で暮らす人は」
「老人が、いやさ庶民がそんな理屈を理解できるわけないだろうが。『儲かります儲かりますなぜならお金刷るからです』っ言われりゃ信じるしかあるまい」
「そこまで単純かなあ」
「トランプが大統領になる世界に生きてるんだぞ、オレたちゃ」
「それ言われると何も言えないな……」

　先輩はグラスをあおり氷を口に含んでガリッ。

「……理屈じゃねえ、インセンティブや金の流れをよく観ろ。そうすれば、その人間や組織がなんのためにそんなことをしたのか、がかなりよく理解できる。あるいは、なぜそれをしなかったのか、が」

「うーむ」
「逆に言えば、『金のみで駆動する』というのが資本主義社会の強みであり、弱みだ。
　信仰や力・恐怖で駆動するよりはずっとマシな社会だし、競争原理が働いて結果として富と価値が蓄積され社会が発展する。それは結果として幅広く健康や安全、便利快適を生む。
　反面、金が絡むと命も尊厳も愛も、つまり明らかに金よりもだいじなものもガン無視だ」
「それが原理だと思えば、いろんな腹立つことに腹立ませんね」
「人間としてまともなメンタリティ持ってりゃ気が狂いそうになるからな、現代社会は。そうじゃなくて、現代社会すなわち資本主義社会はつまるところインセンティブ駆動社会だ。インセンティブすなわち金が神だと思えば、腹も立たん。
　神様の言うこたみんな聞くだろ？　自分もほとんどそうだしな」
「でも先輩が愛を評価するのは意外ですね」
「あたしゃこう見えても研究者だぞ。知的好奇心、す

なわち知識への愛は金なぞよりよほど尊い。金が欲しけりゃGoogleでラジコン遊びしとるわ」
「カッコイイー。
　いや勉強になりました。先輩が奢ってくれる理由すなわちインセンティブもわかったので、遠慮なくいただいておきます」
「おう。
　わっちの研究に付き合ってくれる人間がなかなか居ねーんだよ。よほどの変人でない限り。珈琲でもなんでも好きなだけ飲んでくれ」
「お寿司がいいなあ」
「行くか？」
「え、マジすか」
「高くつくぞ、見返りが」
「パンツ姿ぐらいまでならなりますよ」
「男子のパンツ姿は一銭にもならんわ」
「GoogleAdSense貼ればいいじゃないですか。俺がアカウント作ります」
「エロ厳禁だ」
「俺のパンツは芸術ですよ何言ってんですか」

「パンツはそうかもしれんがおまえ自身がわいせつ物だろう」
「今日はよくお褒めいただけますね」
「しかしパンツ程度だと、ちょっといい回るヤツぐらいかなあ」
「そのお店、日本酒は充実してますか？」
「はったおすぞ。養殖ブランド鯛が名物ってクラス」
「しょうがないわね」
「なんだそのお高く留まり女みたいなー。しかも変に生生しい」
「友達に居るんですよ。別に高く留まってるわけじゃないんですけど、いつもこういう感じのが」
「なんだ、それおまえに押し倒され待ちじゃねーか。なにモタモタしてんだ、はよ犯れ」
「は？　なに言ってんですかもー、そんなコンビニエロ本の読者相談欄みたいな」
「いいか、今日のおさらいだ。その女が『しょうがない』のにおまえの横に居るインセンティブはなんだ。答えろ青年」
「えーっと……ヒマ？　だから？」

「死ね。
　頭熱くなったからアイス食いに行くか」
「お寿司の前にですかあ？」
「てめー本屋の荷物持ち程度で寿司まで食えると思うなよ。そりゃまた今度だ。まずはアイス屋でおたがいのカップの中身をほじくり合う恋人プレイだろう」
「コーンにしてこう腕クロスで腕クロスで食べさせ愛食べさせ愛」
「くだらないアイデアだけは湯水のように湧くな」
「芸術家ですから」
「ふん」

　先輩は本の山から三冊ほどを引き抜いて買う。レジでは一万円札ごと店員に突き出すとカバーも袋も不要と言い捨て、バーコードリーディングが終わったものから無造作に鞄に突っ込んだ。おつりも鞄にジャラリと流し込む。
　持ちますよ、というと「すぐ見たくなるかもしれん」。
　颯爽、という単語がよく似合う。

「……どこ行きます？　このへんだと三店舗ほど」
「もう決めてる」
「俺のオススメとか、聞きたくないです？」
「まず自分の直観を信じるところからだ」

生きてるテンポが違うなあ。
早死にしないように祈るばかりだ。

ジェラート

　ジェラートとアイスの区別がまだついてないわたくしですが、それらが食せる店舗はだいたい華やかなショーケースがあるのでわかります。

「何食うんだ？」
「先輩の好きなの上から四つでいいですよ」
「てめぇモテるだろ」
「男子と動物と子どもとおじさんおばさんには」
「韜晦しやがって。
　……ヘイ・ナイスガール。ダブル・ツーカップ・プリーズ。ピスタチオ、ベルギーチョコレート、マンゴー、淡路島ミルク」
「コーンで、コーンで」
「却下だ。コーンは手で持って食わにゃならんだろーが」
「カップは足で持って食うんですか？」
「片手塞がってたらなんかパッと思いついた時メモも

取れんだろーが」
「俺が持ちますよ」
「てめぇ頭いいな。さしずめインテリだな？」
「アイスは絶対コーンですよ、コーンこれ食えるんですよ？　カップ食えないでしょ？　同じ値段なら圧倒的に損じゃないですか」
「細かいことを気にする男だ。経済学部向きだな」
「芸術に大切なのはディテールですよ。ロボット製作もそうでしょう？」
「まぁな。
　……とと、thx。
　ソー、鞄の中から財布出してカード出して払ってくれ」
「だから俺が持ちますってば」
「てめぇ頭いいな。さしずめインテリだな？」
「はいはい。『寅さん』たくさん観たんですね」

　これはアレだ。先輩は「日常生活ダメ博士」ストックキャラクターだ。きっと。アイスを預かると、彼女は見たこともない虹色に光るカードを取り出した。囁

く。

『……限度額10億とかそんなカードッスか』
『これ？　オドロキマンチョコのコラボカード』
『紛らわしいなぁもう』

　というのはセキュリティ上の嘘八百だろう。こんなところでそんな問いを振った俺も愚かなら、そんなものひっぱり出すこの人も愚かだ。もっとスタンダードな普段遣い用を1枚持ちなさいよ。

「こんなもんぐらい現金でお支払いになれば。その、ノミ退治に28サンチ野戦砲を持ち出すような」
「経費はぜんぶこのカードで払ってるから……」
「え、だってさっき本は現金で買ったじゃないですか」
「あそこの書店カード捌きがおせぇんだよ、後ろのカウンター行って別処理してサインも要る。ここはサインレス」
「なる。いや先輩の方が経済学部向きですよ。

　経費か。夢がないな。デートってことにしときましょうよ」
「専従者控除だ。家族扱いだぞ。夢があるだろう」
「まだちょっと早い、カナ？」
「その気色悪い女のモノマネ異様に巧いのはなんなんだそれ」
「四六時中人間観察してんですよ」
「芸人か」
「芸術家だっつってっでしょー」

　テラス席に座って、真顔でアイスに取り掛かる。俺のはチョコとミルク。……うむ、うまい。

「まずい。換えて」
「先輩、あまり大声で真実を吐露されない方が。異端審問で火あぶりになりますよ」
「『真実は常に大声で。さもなくばいつの間にかそれが許されぬ世界になる』と偉い人も言ってるぞ」
「アインシュタインですか」
「オレだ。

……チョコとミルクは食えんこたないんだよな。日本人は果汁使うのがヘタクソだなあ」
「ここイタリアのお店でしょう。ほら、ゲ、ゲ、ゲゲゲのゲラトーって書いてある」
「こんなもん空輸するわけねーだろ、汁から店員まで全部日本製だアホウ」
「そんなことどこにも書いてませんよ」
「イタリアから持ってきてりゃ太字ででっかく赤で書くって。書いてなきゃ言いたくないんだ。
　なんでここは！
　こんなでかいショッピングモールなのに！
　まともなアイスひとつ！
　食えんのだ！」
「いや、でかいショッピングモールだから、ですよ」
「はあ？」
「日本は土地、すなわち家賃が狂的に高いんです。だから、こういう高そうな場所に入れるお店は、資本力のある大チェーンか、高い単価取っても人が納得する飛び道具のある店か、どちらか。味はまったく関係ないッス」

「んなこと言ってどこにでもある店入れてて人が来なきゃ、モール自体が潰れちまうだろ」
「別にそれで構わないんですよ。土地貸してる方は損しないんで。上に乗ってる人間がコロコロ変わろうと」
「全部取り上げて国有化しろ、土地」
「それまたダメです。そうすると使用権が利権化して、政治といまよりさらにズブンズブンになってぐちょんぐちょんになる」
「滅べ、もう」
「まあ順調にそっちに向かってるんで、あまり急がなくても」
「まあ、すまん。おらっちはハーフ＆ハーフなもんでね。どっちに居ても欠点が目についてイライラするね」
「お父さんでしたっけ、日本人」
「うむ。
　正確に言うと養父。もらわれ子でね」
「ああ、そうなんですか。じゃあ血的にはわからないんですかね」

「調べりゃわかると思うが、あんまり興味がないもんでなにもしとらん。父にはよく『きっと日本人が入ってる』と言われた。それがわたしを気に入った理由のひとつだったんだろうな」
「俺もそう思います」

　眉の濃さとか、小柄さとか。

「……言われた？」
「ああ、亡くなった。両方」
「あらあ……それはお寂しい」
「遠い大学に入って親元離れてすぐさ。クリスマスに帰んなきゃ、と思ってたら突然訃報が届いた。事故でね」
「そうですか」
「なんだかわたしを育てるためにそこに居て、育て終わったら役割終わって天が召した、みたいで、気持ちが悪かったよ」
「司馬遼太郎『竜馬がゆく』のラストですね」
「そうなのか」

「おもしろいですよ」
「読んでみるよ。
　……愛情をずいぶん注いでくれたけど、あまりいい娘じゃなかったな、と後悔してる。一日中部屋で本読んでパソコン睨んでさ。もっとコミュニケートすりゃよかった」
「子どもなんてのはそんなもんですよ。愛を注ぐ対象としてそこに居れば、それが親孝行なのです」
「そうかな」
「逆縁で先に死ぬよりゃ親不孝じゃないッス」
「まあなあ……
　そっちの土臭いピスタチオとケンのあるマンゴーと換えろ」
「ほい」
「……歳とって貰った子だったからか、なにひとつ『こうしろああしろ』言われなかったな。いつもニコニコして何をしても怒られなかった。ありがたかったな」
「よかったですね。ちなみにウチもだいたいそうです」

「そおだろおなあ。のびのび育ってるなあ。いたずらに」
「『自分ではない何か』をイメージさせて、それに成っていくように自分に圧を掛ける、のが向いてる人と向いてない人が居ますね」
「ああ。
　わたしは無理」
「俺もです。
　でも多かれ少なかれ、そういう訓練を積むんですよね、学校とかでね」
「近代教育、ってのは近代型組織で働けるように人間を規格化することだからな。能力も、考え方も」
「子供の頃からそれに慣れてると、それがおかしいことだ、すくなくとも不自然なことだ、と、わからないんですよね」
「だが無意識では息苦しさを感じてるので」
「先輩やウチの局長みたいなのを見ると、発狂する人居るんですよたまに。老若男女問わず」
「ああ、居るね。てかおまえも劇症反応起こされる方だろ？」

「あっし？　あたしみたいな小物は誰も相手にしませんて」
「どうだか。まあ罵倒されたりするよ。『横から失礼します』って。失礼だよ出て来んなカスが」
「まあまあ。
　そういう人たちは、可哀想な人なんですから」
「ホント可哀想だよな。そういうのがあれだろ、『アナ雪』観て『ありのままー』とか絶叫してウェアァア言うて泣くんやろ？」
「なんで関西弁なんですか」
「オノマトペとの相性が異様にいいんだ」
「古い言葉ですからね、関西弁」
「近代教育の最大の弱点は、『頭はいいが努力が苦手』という子どもを総じて落としてしまう点だ」
「といいますと？」
「頭が良くて努力ができない子は、楽をしようとして工夫したりアイデアをひねり出したりする。これが本来はイノベーションに繋がるわけだが、いまは規格化が目標なので、それらは無用だ。与えられたやり方でやりなさい、と」

「あー、掛け算の順番がどうとかこうとか、って話ですね」
「そうだな。
　つまり『頭の良さ』という持って生まれた能力の発揮どころを早くから潰され続けるので、いつしか『ただの努力ができない人』になってしまう」
「イヤだなあ」
「しかもそうこう言ってるうちに大人になると、小馬鹿にしていた努力できるだけの奴が社会的に成功するわけだな。ここに嫉妬と羨望、ルサンチマンが発生する。
　そういう連中が本来憎むべきは、型にはめようとした社会なのだが、そう考えるとはまれなかった自分の努力不足を認めることになるので、いや、これ自体が洗脳なんだが、そこは見たくないので、横ギレして、型にはまってない人間を憎む。これが、いま問題の可哀想な人たち」
「そういう流れですか……なんだあの人たち、と思ってました」
「だから貴様みたいなノビノビと自己肯定感と共に育

てられた人間にはわからんのだ。その哀しみが。ニートになって日がなネトゲでもやっててくれればまだマシで、ネトウヨ・パヨク一直線、ヘイトスピーチを撒き散らし、有名人を中傷して逮捕、裁判、自己破産」
「うーん。
　でも、現実社会は、結果さえ出せば過程は問わないものではないです？」
「もちろんそういうセクションもある。オレがやってるAIみたいな、いまホットなところは実力だけがモノを言う。しかしちょっとこなれてくるとあっという間に固まっちまう。
　あの天下のIBMだって、設立当初は階層が社長・マネージャー・平の三つしかないフラットな組織だったんだぞ。一旦組織が固まってしまえば、あとは『以前からやってきたことを繰り返す』以外の仕事は基本的にはない」
「でもそうすると、変化する社会についていけないですよね」
「だからこの国はこんなにへしゃげとるんだろうが。成果が出てないという現実を見据えたら、まず人材か

ら変えるだろ？　野球チームでもサッカーチームでも、強化したいならいい選手獲っていい監督連れてきていいGMを雇う、これが基本だろうが」
「おっしゃるとおりです」
「頭がいい、というアビリティはレアなので、それ以外の要素が多少凹んでようがキープした方がいい。ところが今の教育だとまず幼稚園で銃殺だ。中共の文化大革命どころの騒ぎじゃない」
「意地悪な質問をしますが、AIの時代になると『頭がいい』はそんなに必要なくなることないです？」
「アホウめ、AIができない仕事を見つけたり創り出したりするのは、頭がよくないとできんだろうが」
「……なんか騙されてる気がする」
「蒸気機関が出てきた時もコンピュータが出てきた時もインターネットが出てきた時も、潰された仕事はたくさんあるさ。しかし、それらのおかげでもっとたくさんのそれまで無かった仕事が創出された。基本的には、同じことが起きると思う」
「なるほど……なんか騙されてる気がする」
「まーそれはともかく、自分を認められず、その反動

で人を認めない、ってのは本当にただの時間＆エネルギーの莫大な浪費にすぎないので、できるだけ早く脱却したいものだ」
「でも引きずりますよね。大人でも中年でも抜け出せてない人多いですよ。『三十過ぎたら遅刻も個性』と宮藤官九郎も言ってますし」
「まあ確かに、むしろ歳をとるにしたがって脱出が難しくなるのかもしれんが」
「……でも『ありのまま』ってそもそもなんなんでしょうね。
『自由』ってことですか。それとも『理想』？」
「『ふつう』だろ」
「それまた難しいですね」
「要は『異常じゃない』ってことだ。
　病気じゃなければ健康だし、
　戦争がなければ平和だし、
　悩みがなければ幸せ、だろう？」
「なーるほど。
　なんかうまいこと誤魔化されてる気もせんでもないですが、そう言われると納得できんでもないですね」

「『じんわりと内側から自然と湧いてくるもの』とか言われる方が困るだろ。
　とどのつまりは暴力、それから抑圧。これがあるとつまり人間は自然な状態ではなくなる。これが不幸、ふしあわせだ。だからこそこれに抵抗するには、非暴力、不服従でやるしかない」
「ガンディーですね」
「いまだに日本じゃ『無抵抗』とか誤訳が普通に流れているので頭の頭痛が痛い。抵抗しとる、つーの。見りゃわかるだろ」
「日本人はよほど『不服従』を黙殺したいんでしょうなあ」
「他人事みたいに」
「日本人にウケる時代劇って、幕末か戦国なんですよ。つまり動乱の世でテロリストみたいなのが活躍する時期。従順な羊の群れにとっては憧れなんですよ、理由なき人殺しが」
「まあそれは近代国家どこもそうかもしれんが……
　話を戻すと、抑圧が強力になってくると、自分がいま不自然な状態だ、と感じることさえ困難になってく

る。こうなるとヤバイ。人間は圧力に耐えられなくなってくると、それを無いもの、無かったことにして精神の平衡を保とうとするからな」
「DV旦那に殴られる奥さんが『でもあの人は愛してくれているの』というヤツですね」
「もっとも悪い人間――本物の悪、モンスターはそれを活用するからな。自覚的非自覚的であるに関わらず」
「尼崎連続変死事件は怖いですよね」
「あれはそれ以前に北九州監禁殺人事件というのがあって」
「それも知ってます。
　初めてWiki読んだ時は呆然としましたよ」
「にんげんというものの悪い方の可能性を見てしまった、という感じだな。あんまり若い者に刺激物を与えるのもどうかという気もするが、人間社会にはこういう化物がまれにうろついてることも教えといた方がいいと思う」
「そうですねえ。ただ、頭で理解してもこういう天才はそれを華麗に乗り越えてきそうな気もしますが。

もはや天災や交通事故の類です」
「まあな……いまだにフツーにマルチ商法や海外投資で年率何百％に引っかかる人がたくさん居るんだからな」
「あの、そんなに美味しい話なら自分のところなんかに落ちてくるはずがない、という永遠の真理はどうしてすぐ忘れられるんでしょうね」
「どうしてだろうな。
　やっぱり目の前に、ほら、アイスがあったら、食べたくなるさ。それでお腹痛たくなった経験が、なんどもあっても」

　パクっ、と一口齧る。

「ともあれ繰り返すが、そういうのは恐ろしい時間＆エネルギーすなわち人生の浪費なので、できればさっさと脱却したいね」
「そこが脱却できた人を『大人』というのかもしれませんね」
「若者は惑うのが仕事、か。

　まあそうかもしれん。40にして惑わず」
「俺のおじさん、45ですが超惑ってます」
「まあ永遠の惑い人も居てもいいさ。いまは何かと情報が多すぎるからな。目移りして、深掘りして、なんてゴチャゴチャやってると、あっという間に10年ぐらい経つ」
「待てよ。
　先輩、逆に言うと、『自分以外の何か』になろうと思わなければ、情報を入手する必要も無くなりますよね？」
「まあ」
「じゃむしろしあわせになりませんかね」
「まあその縮小均衡方向は人によって向き不向きがある。ワシなんかにゃ無理なやり方なんで、なんともコメントしづらい」
「確かに先輩は溺れるぐらいなら鰓呼吸できるように進化するタイプですね。『さかなサン』と呼びましょうか」
「魚類研究で国際的権威になってからでいいよ。
　ま、ただ確かに、特に2010年代に入ってから、個人

でも『情報管理周り』が極めて重いタスクになりつつある実感はあるので、このへんを大きく削ることができれば、かなり楽にはなるな。しあわせかどうかまでは断言できんが」
「知識とかも、所有せずに右耳から入って左耳から出ていく、みたいになるんでしょうかね。知識オンデマンドとか言って、必要になった時にすばやくググる、のみ」
「いや、頭ン中を通る時にある程度は定着しちゃうと思うんだけど……ちょっと自信がないな。いまだって程度の差こそあれ、その瞬間だけ使う知識をその場で手に入れたりするしな。あるいは他の知識のカケラからブリコラージュするとか。
　どっちにしろ、こう、世界は大きく流れていってるわけだから、その流れに乗ってるちいさな船である自分、これがどうやったら難破せずに、できれば自分の思うような方向に行けるか、これが問題で」
「俺のおじさんみたいに、流されっぱなしじゃダメですかね」
「まあダメってわけでもないんだけどな。メシが食え

りゃ、いや食えんでも、生き方に貴賤は無いさ。
　ただある程度は、手応えが欲しいだろ、手漕ぎでも帆走でも機走でもなんでもいいんだけど、『進んでる』って実感が」
「むしろどっち向きかとか、スピードとかより、その手応えの方がいいものかもしれませんね」
「だな。舵取りっていうかな。
　まあその、可哀想な人の何が可哀想かと言って、舵が奪われてるんだな、つまり」
「そうですね。人に操作されちゃってるんですね」
「それはとてつもなく辛いと思うぞ。つまり人間ではなくロボットになってる、ってこったからな」
「先輩のAIのがマシですね」
「そうかもしれん。こう動きなさいああ動きなさいと子供の頃から叩き込まれて」
「時には文字通り物理的に」
「指令や鞭が無いとそのように動けなくなり、誰かのそれを無意識に求めるようになり」
「そういうのを利用するのが巧い人間に取り込まれ、操られ」

「死ぬまで好きなように動かされる」
「「ぞぞ〜〜〜〜〜〜〜」」
「……ゾンビですね」
「マイケル・ジャクソンの『Thriller』だ。あれそういう歌だからな」
「そうなんですか？」
「ウイ。ゾンビの服をよく見てみろ。みんな普通のカッコなんだ。死者に着せる白装束やパジャマではなく。つまり生きながら死んでる。『これ観てるおまえらだいたいゾンビだ』ってマイケルからのメッセージだよ」
「コワー。やっぱすげえなマイケル」
「じゃなきゃあんなに世界中で売れるか。
　だからマイケルはそれにまだ毒されていない子どもの魂を守れ、とグラミー賞で演説したんだ。いったんこの黙殺歪み認知システムが作動を始めてしまうと、そこから脱却するのは非常に困難だからな。
　成人してからハマったマルチ商法から足抜けさせるのでさえ難しいのに、枠がもっと大きな枠だから、もっとメタ視点が必要だ」

「メタ視点持てるようなら、そもそも罠には落ちにくいですもんねえ。
　でも歪んだ認知で、自分に都合のいい、結果的に事実と異なる、そんな言説ばかり集めてると、いつかその姿勢がバレて社会的に没落しませんか。そこで終わりでしょう」
「なにをぬるいこと言っとんだ君は。そこに没落者同士のコミュニティがあるだろうが」
「いやだってそんな落人の里みたいな」
「アホウ、ネタによっては普通に大学教授や国会議員や芸術家だってウヨウヨするような沼があるじゃろが。そこ行けばむしろ大歓迎されるしな。カスみたいな人間がそういうのに持ち上げられたら舞い上がってダイナマイトでもなんでも腹に巻いてどこにでもブッコミます、て感じだ」
「世も末だ」
「末は終わったよ。その先だ。
　まあつまりそれもインセンティブなんで、その人が何をインセンティブにしてるかよく見極めれば、腹も立たんよ。可哀想に、とか、お金に困ってるのかな、

とは思うけど」
「先輩ほどクールにはなれないなあ。芸術家だからかなあ」
「おれこんなに自分でゲージュツカゲージュツカ言う芸術家知らんぞ。おまえこそ無理してないか」
「……ぎく」
「さっき見せてもらったアレな、アレちょっとアカンぞ」
「……いやまあ、期待値と言いますかハードルと言いますか、が徐々に徐々に上がってて、ですね」
「誰の。
　ああ、部長か」
「……まあ。異性としてはまるでピンとこんのですけど、クリエイターとしては若干リスペクツしてますんで、
『ほんだぁーッ！　これだぁーッ！』
って絶叫されましたらやはりその方向かな、と……」
「おまえの相手は凡人だろう。狂人に気に入られてどーすんだ」
「いやまあ……といって手が描いたような面白みに欠

ける風景画を満座にお披露目するのも気が引けましてですね」
「てめぇの満足はどうでもいーんだ、観た人が田舎でも思い出してほっこりすりゃ、そりゃいい絵だろ」
「いやそーなんですけ、ど。
　……先輩的にはやっぱりああいうのはアレですか」
「ああいうのはアレだなあ。ああいうのはやっぱ本物の本物がやらんとなあ。20そこそこで死ぬような。迫力勝負、みたいなとこあるからなあ」
「さすがニューヨークで揉まれたお人」
「別に留学しろとは言わんがいっぺん観に行ってこい、一週間ほど。あ、いや、こんど行く時いっしょに行くか？」
「えっ？　い、いいんですか？　まさかひょっとして旅費とかも出たり？」
「あー出す出す。アシスタントてことにすりゃ経費になっから」
「イヤッホゥ。
　いきますいきます。どこへでも。南極でも、ベネズエラでも、南スーダンでも」

「まあバカみたいなヤツいっぱい紹介するよ。独身のくせにボストンに家を5軒持ってるスター・プログラマとかな」
「アホですね」
「金の使い方知らねーんだよ。
　あのアメリカのシステムもどうかと思うぞ。持ちなれん金は人を不幸にする」
「よく宝くじ当たるとその後の人生不幸になる、と言いますもんね。
　でもそんなウィザードみたいな人たちと話合うかなあ」
「心配すんな、だいたい一芸にしか秀でてないから『ふつう』ってのにコンプレックスあるんだ、てめぇみたいに『青春エンジョイ！』てのがいちばん苦手だ。まず相手が先手必勝気味にジャーゴン撒き散らしてマウントしてくるから、『彼女が三人いて』でひっくり返せ」
「さん……にん……」
「指を折るな。候補から選ぶな」
「いや詳細聞かれた時にちゃんと答えられないとただ

のカマシだとバレるじゃないですか。の脳内シミュレートを」
「別にこれっぽっちも興味ないが、ちなみにどれとどれとどれだ」
「春とランと……まあこの二人はこういう時に使ったというとゲラゲラ笑ってくれそうなんで」
「別に事後報告せんでええだろう」
「隠してると恥ずかしいじゃないですか。むしろ。顔合わせた時にイマージュが逆流してきたりして」
「想像力が高すぎる。あと一人は？　やっぱり部長？」
「いや、それは無理なんですってば」
「美人じゃねーか」
「美人だから怖いんですって、憑き物っていうのは。もホントにね、横溝正史の作品世界に迷い込んだような気になりますよ」
「池から脚出してな」
「懐中電灯二本鉢巻に挿してね。
　あそうだカマシていくならバイってことで善二郎にしとこ……か……な……無理」

「しょーがないな。オレでもいーぞ」
「ああ！　いいですね、じゃお借りします。
　いえーい」
「あまりハードなのは無しだぞ」
「ソフトですよ。ぼくはソフトです。あまりにもソフト。やわらかすぎてほっぺが落ちそう」

　……にへら。

「やっぱヤメ、前言撤回、許可しない」
「……オウ、イエス」
「やめろー！」
「オウイエス言っただけじゃないですか」
「もう顔がおかしいんだよ！　犯罪者の顔だ！」
「しっけいなー」
「妄想禁止！」
「俺から妄想を取ったら何が残るって言うんです！
　多少顔がいいことぐらいしか」
「やかましい！　連れて行かんぞ！」
「はいすぐやめます。

　しかしあれですね。僕、ロリババア趣味なんて無かったんですがいざその気になってみると意外とありですね」
「おらぁババアじゃねー」
「あっ、精神年齢的な意味で」
「そっちもだ」
「ロリでババアで金髪で濃眉で天才で辛辣、跳満だ」
「ババアじゃねえ、っつってんだろもー」
「天才の代わりに巨乳が欲しかったな」
「くそう、もう寿司屋でオレの食べ残したシャリだけ延々食べる刑に処す」
「わはははははは、むしろご褒美ー！」
「うわあ本物だー！
　本物がここにも居たー！」
「わはははは、ゲージュツカとしては偽物だけど変態としては本物ー！
　……うわーーーーーーん……」
「泣くな！　男だろ！」
「うぃーーーーーーん……」
「悪かった、オレが悪かったから。な。よし、寿司食

べよう寿司」
「……ガリも食べていいですか。酢飯だけだといっぱい食べられる自信無いです」
「どこまで卑屈なんだ。ネタ食っていいよ。わかったわかった、なに食べてもいいから。な。泣くな、男の子なんだから」
「先輩、俺やっぱコンテンポラリー諦めて、ふつうの絵を描きます」
「ああそうしろそうしろ。風景か？　ネコか？」
「……先輩。
　できれば裸体で」
「もう帰る」
「いやーん。うそーん。じょうだーん」

　……などと申しており。
　よし、先輩をモデルにして天才美少女エンジニアが自作の人間そっくりアンドロイドと共に悪に立ち向かうアクション・コミックを描こう。タイトルは『ツイン・エンジェルズ』。
　ほら、アイデアが凡庸でしょう？

　やかましいわ。

「……なーんてアホウなことを言っていたら、ひさしぶりに古いのを観たくなったな」
「古いの？」

　先輩はニヤ、と笑った。
　む、カッコイイ。これは真面目な話っぽい。アイス喰ってる時はどう見ても小学四年生なのだが。

「おい、あんた、明日空いてるか」
「だからその『おい』から始めるのは……ええまあ」
「付き合え。いいもの見せてやる。貴様にもマイナスにはならん」
「ほう、なんですか」
「行きゃわかる。私のささやかな趣味のものさ。駅に八時な」
「早いですね」
「ちょいと遠いんだ。
　いや待てよあそこ土曜空いてっかな」

　言うやおそろしいスピードでスマホを操って確認する。
　OKらしい。

「……友人に段取り頼んでおこう」
「ついでにそのへんで美味い寿司屋も」
「わかってるわかってる。案外抜け目ないな」
「抜け毛もまだ無いです」
「安心しろ、私は毛量で好き嫌いを変えたりしない」
「じゃあ、先輩の前でだけ、本当のわたし、見せちゃう☆」
「だからそれ超キモい。なんだその神経直接素手で逆撫でしてシナプスを逆に進むみたいな。特技だぞ」
「だからゲージツですって」
「変な絵で暇つぶしてないで、その無用な能力をマネタイズしろ」
「よく言われます、絵以外はなんでもセンスいいよね、って。
　……俺、もう、終わりなのかな……」

「まだはじまってもいねぇよ」

　――テラスの席を立つと、先輩は

「じゃな」

と軽くひとこと残して振り返りもせずスッ、と街の雑踏に消えた。
　鮮やか。
　まるで風の又三郎だ。
　いや会ったこと無いけど、字面のイメージで。

洋館

　――駅で待ち合わせると快速電車に30分乗って隣の市へ移動する。そこから地下鉄と徒歩をさらに駆使して都合1時間強、たどり着いたのは、閑静な住宅街に忽然と現れる瀟洒な洋館。こじんまりとしてはいるがいかにも堅牢な建物で、壁の白が眩しい。
　古くて、イイモノだ。

「……スパニッシュ・ロマネスクですね。修道院風なのかな？　いい建物だ。こんないい建物がこんなところに」
「おっ、言うだけあってちぃーたぁーわかってるじゃねぇーか。
　なんでも義和団事件の賠償金で建てた建物らしいぞ。スタイルは欧風なんだが、中身は中国学研究のメッカとも言える場所でね。この大学らしい研究拠点だ」
「へーっ」

　門柱には『東アジア人文情報学研究センター』とある。

「書庫には30万冊の漢籍、中でも古い書、たとえば宋代ともなると、もはや本国中国にも残ってないものがここにある」
「おーっ」
「見るか？」
「観たい観たい」

　受付に顔を出すと『坂下教授から伺っております』と初老……いやもうだいぶ老、なおじいさんがまるで拳法の達人の風情でするり、と先に立って歩く。
　廊下を歩くとそこかしこでいかにもな古い書と格闘する老若男女がぽつり、ぽつり。
　こうして知は守られていく、という現場を見てるようで、なんだかふわふわした。

「……先輩の普段とは真逆なんでしょうね」

「なんだか安心するな」
「先輩でもですか」
「ああ。人工知能なんてどこも無駄金あるからピッカピカの新建材でな。吐きそうだぜ」
「身体に悪そうですよね」
「全館完全空調なんざクソ食らえだ」

　すこし広い部屋の大きな机の前で、『ではわたくしはご要望のものをお持ちします』と老案内人は言い、ものの数分で書物満載のワゴンを押して還ってきた。前もって用意してあったのだろう。これをプロ・サーヴィスと言う。

「……これとかどうだ」

　マイクロフィルムを拡大する機械にかける。写し出されたのは、

「うわあこれはみっしり……お経、ですか。いや待てこれ漢字じゃないな……あっ、莫高窟！？」

「やるねぇ。素人にしちゃ上出来過ぎる。
　そのとおり、敦煌の蔵経洞から出てきた古写経だ。ウイグル文字にチベット文字、西夏文字もあるぞ」
「ファンタジックですねー」
「……こっちはもっと古い」
「あっ、これは歴史で習いましたよ、甲骨文字」
「殷代だな」
「デザインが素晴らしいですよねえ」
「……そして、こちらは原本になる。さっき言ってた宋の時代の漢籍」
「おおお」

　白い手袋を着け、一枚一枚そーっとめくる先輩。紙が痛まないようにか、一枚ごとに別の紙が補強のように入っている。

「……この紙で補強するやり方も、えーっとこれなんて言ったかな」
「先輩でも物忘れするんですね」
「専門外のことまで全部覚えておれんわい。

　ともかく職人芸で、これもう本国中国でも数人しかできないらしい」
「えーっ、13億人も居るのにですか」
「アホウ、雅楽の篳篥のリードに使う葦、日本で一箇所でしか獲れないのだが、近々高速道路の橋脚に踏み潰されて絶滅する予定だぞ」
「シチリキ聞けなくなっちゃうじゃないですか」
「そんなことより高速道路の方が大事なんだろ。人口減ってるのにな。その高速知ってるか、キリシタンの墓壊して通すんだぜ」
「えーっ！？　罰が当たりますよ」
「もう当たった。建築中に橋桁が落ちて二人死んで八人怪我した」
「こ・わー……そんなに大事なんですかね高速道路」
「大事なんだよ、高速道路」

　本当につまらない話をしながらしかし、先輩の目と手は止まらなかった。まさか読んでいるわけではあるまいがしかし、見ているだけで美しい。
　いや、書の方ですよ。

　当然歴史書だったり教科書だったりするわけだから楷書なんだけど、そこいらのいわゆる「書」なんかよりはるかにソソられる、と俺は思う。

「……綺麗ですね」
「ああ。おそらく当時最高のプロが全能力を賭けて書いたものだからな。緊張感が伝わってくるな」
「さっきの甲骨文字も良かったですが、やはり実物の肌触りにはかないませんなあ」
「うん」

　まあ確かにこれに比べれば、俺のやってるものなどお遊びにもならん。

「……書がお好きですか」
「というより筆跡が好きでね。人の息遣いが伝わるだろう。アラビア書道なんかも好きよ」
「あああありますね、あれもおもしろいですね。俺も好きです」
「……これ1000年経ってこんな異国の地で異国から来

た人間に見られるとは思ってもいなかっただろうな」
「でしょうね。
　『縁』って不思議ですね」
「ああ。
　デジタルデータなんざすぐ飛んじまうのにな。紙に墨で書きゃ1000年保つ」
「あはは」

　古書を集める人の気持ちもわかる。集めているのは本ではなく、作者のきもちみたいなものだろう。古い本ほど、それはよく伝わる。
　……まあ現代でも同人誌のコピー誌なんかだと不要によく伝わるんだけどね。

　あまり長い時間貴重なものに触れていても気疲れがするので、適当なところで切り上げた。一般閲覧室みたいなところへ移動して、気軽に開架書籍を舐め回してまわる。
　もうチンプンカンプンというか、ぜんぜんわからないんだけど。

　先輩はまた書店でのように何冊も積んで、めくっている。
　すごいなこの人。

「……『三国志』とかありませんかね」
「『演義』か？　あると思うぞ、ちょっと待ってろ」
「いやいや、いいです冗談です、あっても読めないッス。中国語だもん」
「しかも古いヤツだからな。もちろん『西遊記』も『水滸伝』も当然ある」
「『ドラゴンボール』は無いかな……」
「ふっ」
「建物ちょっと回ってきます」
「それがいい」

　すこし探検してみた。
　瓦は抑揚の強い欧風でありながら（ジブリアニメに出てきそうなカタチだ）、色は和風のいぶし銀。パティオらしき中庭があるが、植栽もあってかなんとなく坪庭、つまり町家っぽい。

頑健な作りはおそらく最初から書庫、図書館を想定していたようだ。三階層ぶち抜きの大きな吹き抜けはヨーロッパの古い大学にありそうな。
和洋折衷に中身は中華か。
チェーン居酒屋みたいだな、というのはあまりに失礼かな。

戻ると美少女は横手に脚を組み頬杖をついて古書を愛でている。
絵になるなあ。
さすがだなあ。
絵でも描くか。

「……やめろ、肖像権の侵害だ」
「じゃ脳の一番奥深いところにメモリーしますよ」
「なんでそう気色悪いイメージを次々に投下できるんだ」
「『イヤラシイ、いいじゃないか』と岡本太郎先生もおっしゃってます」
「ＴＡＲＯぐらいの大物だから言えるんだよ」

　両の人差し指と親指をＬ字型にして組み合わせるイヤラシイ手業をしていると、叱られた。

「いますごいフォトジェニックですよ」
「普段そうじゃないみたいな言い方だな」
「こりゃ失礼。
　意味分からないもの読んでて飽きませんか？」
「いや、まあ、雰囲気みたいなもの感じてるだけだからな。
　中身はいまはずいぶんデジタル化が進んでるんで、GitHubなんかにいくらでも転がってる」
「へー」
「言語はその国、その民族の歴史そのものだからな。どこの国もなによりも大切にしてるぞ。してないのは日本ぐらいじゃないか」
「ああ中国はもちろん、イギリスとかフランスとかやってそうですね。国家がバックアップしてこの言葉を広く世界に知らしめんと、みたいな」
「……日本語をきっちり勉強しようと思ったのよ。私

は家でダディの言葉聞いたり、アニメ観たりして得た口語しかなかったんで。で、参考書いろいろ漁ったんだが、ピンとくるのが無くてな」
「あれ、たくさんありませんか、書店に」
「日本人向けのはわりとあるんだ。これもあとで調べるといまひとつだったんだが……外国人向けのこう、システム化されたスタンダード、ってのが無い」
「うわあ無さそうだな……文科省ほど無能な役所ありませんからね」
「日本語、他の国の人々に話してもらいたくないのかな」
「かもしれませんね。内向きですからねそういうことは」
「ひょっとすると成り立ちが影響してるのかもしれん。
　おい、日本語の源流って知ってるか」
「いや、知らないです。
　やっぱり中国か朝鮮から来たものじゃないんですか？」
「それがどっこい、孤立語といって他に類型の無い言

葉なんだ。朝鮮語は語順は似てるが音素が違いすぎる」
「あー、韓国料理の正確な発音って、読めませんもんねー」
「もちろん中国語とは文の構造自体が違う。中国語は基本的に英語風に言えばＳＶＯだからな」
「そうですね、『我・愛スル・君ヲ』ですね」
「ということで大野晋という天才言語学者が唱えた説が『日本語クレオールタミル語説』。批判も多いがな」
「くれおーる？　タミル語？」
「タミル語ってのは南インドの言葉だ。スリランカの北部やマレーシア、インドネシアにもある。話者七千万人の大言語だぞ。ほれ、『ムトゥ　踊るマハラジャ』て映画あるだろ」
「あー、スーパースター・ラジニカーント。カッコイイですよねあのおっさん」
「ああ。あれタミル語映画。
　クレオールてのは植民地なんかで発生する、現地の言葉と外部から来た言葉が分かちがたく混ざる現象

だ。たとえば私の親がブロークンで英語しゃべって、これをピジン語というのだが、私が日本語と英語をチャンポンで話す。これがクレオール」
「ルー大柴さんみたいなもんですか」
「まあ、そう、だな。
　つまりあのへんから海渡って真珠採りに来てた人々が、縄文人とコミュニケートしてるうちに、縄文語とタミル語が混ざってしまった、みたいな」
「そんな遠いところから来れるもんですか」
「来れる来れる。古代人の航海術なめちゃいかんぞキミィ。フェニキア人はBC7世紀にアフリカ一周回っとるからな。日本人だってチリとかあのへんまで行ってたという説もある」
「へーっ」
「科学の徒であるわれわれは、それを知らぬ古代人をバカにしがちだが、体術や生活の知恵という面では彼らに遥かに劣ってるからな。絶対に沈まない壊れない丸木舟で、海流に乗って魚と海鳥食べて海水飲んでりゃどこまでも行ける。
　タミル語の古い詩には五七調があって、日本の長歌

と同じ、五七、五七でつなげて最後七七の形がある」
「おお」
「カラス勧進とかとんど焼きの風習があったり、まあおもしろいから一度大野先生の本読むといい」
「はい。
　あれ待てよ、じゃその縄文語はどこから来たんです？」
「それも北方系のアルタイ語族と、南方系のオーストロネシア語族のクレオールではないかと言われていたり」
「アジアから来た人々と南方諸島から海渡って来た人が混ざってるんですね」
「そそ。
　昔はベーリング海峡だって陸続きだった時期があるから、カムチャッカからも来れるし朝鮮半島からも来れる。つい数万年前の話だ」
「東が家父長制で西が母系集団というのも、関係あるんですかね」
「あるかもしれんし、ないかもしれん。
　文化は意外にしぶといものでもあるし、環境によっ

てコロコロ変わるものだしな」
「縄文人と弥生人とか、言うじゃないですか」
「それちょっとなんとも言えん。一時DNA解析が盛んになっていろんなグループが入ってることはわかってるんだが、それがどこからどうきてどう広まったかとかはまだ不明なところも多い。
　まあしかしいろんなバラエティに富んでるのは確かで、たとえば欧州の白人系にしか居ないグループもすでに5%ほど居る」
「欧州、ってことは明治維新以後ですよね」
「現実的には昭和も戦後以降、70年で、もうそのぐらい居るわけだな」
「先輩もそうですね」
「まあな。
　最近スポーツ選手なんかミックス多いだろう」
「ああもうダルちゃんにオコエにケンブリッジに高徳に武蔵くん」
「芸能人もだな。まあ、民族や国家なんて概念すら無かった頃はもっとテキトーに混ざっていたんだろう」
「そりゃそうですね。俺だってどこから来たのかわか

りませんしね。インドから来たのかも」
「女たらしはチンギス・カンの末裔かもしれんな」
「またそんなことを言う。5人も嫁さん居たらしんどいじゃないですか」
「その他に側室が30人居たそうだぞ」
「どうやって管理するんだ、好感度フラグ」
「アホウ、ほっといてもずっとマックスなんだよ。向こうが攻めてくるんだ。
　まあ徳川家斉だって記録上だけで16人も奥さんが居て55人も子どもが居たわけだし、どこにでも女好きは居る」
「だーかーらー」

　先輩は口角をちょっと上げて、目を書物に落とした。
　反撃ではないが邪魔をしてみる。

「……そんなワールドワイド・ミックスな先輩から見てどうすか、日本文化って」
「ああ。

……うーんと」

厭うでもなく先輩はちょっと宙に視線を彷徨わせて、

「……私がざっくり見た感じ、『二重構造』って感じだな」
「といいますと？」
「さっきのクレオール語説じゃないんだが、地層のように重なっているんだ。身体的な古層の上に、知性的な新しい層が乗っている、ような」
「ほうほう」
「ホレ、なんとか言うだろ日本語で。えー……あ、あれだ、
『ホンネとタテマエ』」
「ああ……それは微妙に違うかもしれませんが、まあ、言いたいことはわかります」
「パチンコってのはおもしろいな。あれ立派なギャンブルじゃねえか」
「そうですね」

「官営以外のギャンブルは禁止だろ？」
「うーんと……あの両替部分は第三者が二段階入って勝手にやってるという理屈で、三店方式っていうんですけど」
「現実問題そうでないならいかんだろう。法律ってものは立法精神・立法意図に基づいて運用するもんだ。すぐ改正して現実に対応せねばなるまい」
「いやー、まあー、それはそう、なんですがー」
「ホレ、そのへんが日本文化、って感じだ。
　タテマエ、頭ではギャンブルは規制せねばならん、管理せねばならん、とわかってはいても、身体的にはやっぱりやりたいよね、と思ってるからああいう変な形になってるんだ」
「うーん……まあパチンコに関してはいろいろ歴史的経緯もあって」
「歴史的経緯を言い出せば競馬だって宝くじだって古来延々続いてるものだろう。
　禁煙と同じで莫大な量の依存症患者が出て富が毀損され、エンタメ業界なんかあれに金となにより時間吸い取られて自分たちに回ってこない市場が相当あるん

だから、庶民はもっと怒ってもいいと思うのだが、むしろ楽しそうに通いつめている」
「そりゃ一部のアニメなんかは持ちつ持たれつなので……」
「……とまあ、かように、表があって裏がある。
　外から来ると、『Why Japanese people!?』て感じだなあ」
「裏の話を聞けば『ああ』と理解できることが、たいてい隠されているんですよね」
「そうだ。
　まあ流浪者の与太話と聞き流してくれていいが、隠してるとな、そのうち忘れるんだよ。
『宇宙の孤児』って傑作SF知ってるか」
「知らないです」
「巨匠ハインラインの若い頃の作品だ。
　街ひとつ数千人が暮らす大型宇宙船が、宇宙移民のため、数十年がかりの恒星旅行に飛び立った」
「あーそれ日本にもあります、『メガゾーン23』」
「それ系のネタ元だ。
　ところが途中で反乱が起きて、船のミッションを知

る乗組員達が全て死んでしまうんだ。残された者は全自動化された船で宇宙をさすらうわけだが、『宇宙船に乗って宇宙を進んでいる』ことも忘れてしまう。もちろん、その目的も」
「それはイヤですねえ」
「主人公はとあるキッカケでその事実を知り、世間に流布する『常識』と闘い、ついには……とあとは本編で」
「気になるなあ。無事宇宙船を最終目的地に届ける？」
「ふふん。
　まあそんな感じで、本来の目的が隠されていると、みんなして漂流してしまうわけだ。日本の原子力政策だってそうだろう。当初は核オプションだったのが、それを隠すから話がわけわからなくなる」
「それよく聞くんですが、ホントですかね」
「馬鹿者、科学技術庁の設置が昭和31年だろ？
　戦後11年、まだ戦争やった連中が現役も現役の時代だ。原爆・水爆持ちたくてしょうがないに決まってるじゃないか」

「被爆国ですよ」
「だからだよ。どこの国の人々よりもその威力を文字通り骨身に染みて知っている」
「うーん」
「科学技術庁とは名ばかりで実際の科学・技術向け予算はほぼ通産省が持ってた。だからここは要するに原子力と宇宙関連専門だ。核技術とミサイル技術だな。あと潜水艦」
「なるほど」
「それだったらそれでいいんだ。
　長官を2回やった中曽根康弘がはっきり『核は持たないが、いつでも持てるように準備はしておくべきだ』と言っている。そういう部門だとくっきりさせておけばいいのに、隠蔽するから忘れる。忘れてるから省庁再編で文部省とくっつけるなどという愚かなことをする」
「愚かですか」
「ただのボンクラ集団だった文部省が狂人集団に様変わりしてありとあらゆる教育行政がぐっちゃぐちゃになったのは、2001年のその時からだ、って古株の教授

はみんな言ってるぞ。
　持ち慣れぬ軍事予算握って気が狂ったんだな。こないだの宝くじの話といっしょ」
「俺たち無辜の学生は巻き添えじゃないですか」
「そうだよ。可哀想にな。日本で多少働いた経験があって、両方知ってるアメリカ人教授なんかは
『アメリカの教育行政もいろいろ問題があるが、文科省が無いだけマシだ』
と笑ってるからな」
「えー」
「国防予算のうちの核開発予算だ、ってハッキリ言えばそんなことにはならなかったのに」
「それが言えないんですよねえ……」
「言えないことなら止めろ。
　それだけのことだろう。なんでそこで隠すんだ」
「うーん……」

　どうしてだろう？
　俺も日本人の端くれなのでなんとなく気分はわかるんだが、うまく説明できない。

「それって結局、大昔から二重構造に慣れ親しんでるから、むしろホンネとタテマエの二重になってないと落ち着かないんじゃないのか。
　漢字とひらがなとか。
　公式文書と常用語をわざわざ変えてある、っていう時点でおかしいだろ。憧れの漢字一本でいくか、ひらがな作ったら朝鮮みたいにそれ一本でいくか、普通はせんか」
「普通はそうですよね」
「元号と西暦ってなんだ。せめて公的に使うものぐらいはどっちかに決めろ」
「アメリカ人だってヤードポンド使ってるじゃないですか」
「アホウ、ヤードポンドしか使わねーんだ。使い慣れんメートル法と併用したりするから火星探査機をロストしたりするんだ」
「ダメじゃないですか」
「まあダメな仕事はどこの国でもダメってことで」
「まあでも、めんどくさいといえばめんどくさいです

が、おもしろいといえばおもしろいですよ。いろいろある方が」
「まあなあ……
　とりあえずこの作品、『科学者』という職業が聖職者になってて、物理の教科書の文言を伝えるのが仕事になってる、てのが皮肉が効いてていい。学者、研究者ってのはほんの少し気を抜くとそうなるからな。中世に異端審問、魔女狩りしてた連中をけして笑えん」
「そもそも昔は神学と科学の区別無いですしね」
「うむ。
　それといつの世でも、若いもんが出世するには偉い人のやったことの補強みたいなことするのが手っ取り早く成果出るからな」
「30年賭けて一発当ててやろう、てのが学者さんの心意気でしょう」
「芸術家だって無理だろ、そんなこと」
「ムリッスね」
「まして大学というのは研究と教育の両輪がある。
　研究はいくらアグレッシブなことをしてもいいが、教育は一応評価の定まっているスタンダードなことを

若者に伝える、という使命があるので、まあ基本構造からしてコピー＆ペーストに馴染みやすいな」
「そういえば司馬遼太郎先生が言ってますよ。
『東大は西洋文明を日本中津々浦々に行き渡らせる配電盤だ』
って」
「なるほど配電盤か。その例えはいいな。
　元々東アジアには強力な官僚機構の伝統があって」
「科挙ですね」
「官僚機構というのは、いままで巧く回ってきたものを回し続ける事務方なので、問題でも起きなきゃ新しいものを嫌うわな」
「問題起きてても見ないふりすればいいだけですしねえ」
「権力が官僚機構をハンドリングしてるなら『これをやりなさい』と命じればいいわけだが、権力側が脆弱だと逆転現象が起きる。
　私の知ってる会計事務所、100人から所属する結構な大手なんだが、そこで一番偉いのは理事長でも最古参の会計士でもなく、事務のおばちゃんなんだ」

「わかった。その人居ないと雑務回らないから」
「そうそう。
　年収四桁のエリート会計士の先生方が、出張行ったらまず買うお土産は家族も同僚も差し置いてそのおばちゃんへのものだと言う」
「おもしろいですね権力って。
　それ、アウトソースはできないんですか」
「会計や税務なんてあんなもの全部人つながり以外ねーじゃねーか。サーヴィス同じなんだから。そういう情報全部握ってんだよ、あそこの社長さんとこに孫が生まれた、誕生祝い贈る、とか、あそこの居酒屋が三店目を出した、お花贈る、とか」
「だからそのデータをですね」
「おばちゃんの頭ん中にしかねーんだよ」
「怖っ！」
「スゲエぞおばちゃんのサバイバル能力。
　それはいいとして、官僚機構てのはこのおばちゃんみたいになる可能性が多々あるわけだな。さりとて人事その他で頭から押さえつけちゃうと、政権に言われたこと以外今度は何もしなくなるので業務がさらに滞

る」
「だからそこはAiで」
「うん。
　私が思うに、AIが比較的容易に役立つようになるのは、実はこの分野じゃないかと思ってる」
「ほうほう」
「政治って基本的に対立概念なので、解は二つのどちらかかもしくはどこかの着地点にしか無いだろ？
　だとしたら極端に言えばABテストを浴びるほどやって、同種の問題に直面した自治体を世界中結んでビッグデータを蓄積すれば、『この種の問題の時にはこのぐらいが落としどころです』というのが瞬時に出る」
「それで当事者が納得できますか」
「できるんじゃないかな。裏付けがあるからな。
　事件・事故の和解金や示談金だってそうだろう。裁判所が類例から導き出した相場があって、相場だって言われたらそこに初めて直面した当事者は引き下がるほか無いわな」
「極端な例ですが……たとえばアメリカと中国が戦争するから、どっちつくか、とか」

「たぶんAIの方がその時点で結果的に正しい解を出してくれると思うが、それでも信じられなかったら期限3日で国民投票すりゃいいだろ。電子投票ならその瞬間わかるんだから」
「デジタル・ディバイドは」
「小学校の体育館にスマホ並べりゃいいだろうが。そもそんな大問題で『投票方法が無い』とか抜かす人間は民主主義に参加する資格がない。アフリカの内戦終わった国で民主選挙やるっていったら、みんな3日かけて歩いて投票所来るんだぞ。
　……とまあ、それは研究者の暴言で」
「『やれる・やれない』の前に『やる・やらない』ですね。
　でもそうするとつまり官僚機構なんかもう要らなくなるじゃないですか」
「ホントいうともうほとんど要らんのだ。
　近代的教育、というのは前にも言った気がするが役人と兵隊と工員を大量生産する教育なので」
「うわあ、全部要らねー」
「そう、そういうジョブがマイナーになった現代で

は、思考力、直観力、そしてできれば創造力をブーストするような現代的教育にシフトしていかねばならんのだが」
「まったくそうなってませんね」
「ま現場レベルではがんばっとるんだがな。私があの学校選んだのも、比較的マシだからだ」
「ええ、自由と、あと学校側からのハラスメント？の類は殆ど無いですね」
「まあ何もできんならほおっておくのが一番だ。ヒポクラテスが言ってるぞ、『病気になった時、なにもしないのは、中程度の医者に掛かるのと同じ効果がある』」
「つまりヤブ医者にかかると悪化する、と」
「うむ。
　それでおもしろい話があって、一時ある証券会社が株シミュレータをwebに載せててな」
「取引をヴァーチャルにできるわけですね」
「そうそう。それでさ、何万人も居る参加者が儲けた額でランキングされてて」
「上の方は凄いんでしょうねえ」

「そう、それで射幸心を煽るのが目的だな。確かに種銭1000万だったかな、で何億って黒字出してて『おっ』と思うのだが」
「そんな人はごくわずかで」
「スタート時点で、つまりプラマイゼロの状態で上から1/4の所にいるんだ」
「1/4かあ。つまり75％の人は株で損するわけですね」
「まあ本気じゃないとかアクティブユーザーはどれぐらいだとか、いろいろツッコミどころはあるが。
　話を戻すと、ということで、そういうもはや不必要――が言い過ぎなら、かなり特殊な能力な萌芽を持った子を集めて、極めて特殊なジョブにつかせるために偏った特訓をするのが、東京大学だ。いまとなってはほとんど無意味で生産性も無いことに人生を賭けさせる代償が、『日本一』の称号だな」
「それも要りませんねえ。世界一ならともかくねえ。
　よく、『ノーベル賞があまり出ない』と言われますが、いま成り立ちを聞くと『そりゃ出んわな』という感じですね」
「新しいことやるわけじゃないからな。

　だから東大生でも、ちゃんと頭いい子は途中で『あれ？　これおかしいぞ？』と思って外へ出る。だから私大や地方大の准教授ぐらいでキラッとした本出してる人のプロフィールをよく見ると、東大卒だったりする。
　でもそうすると帰れない。新しいことやカッコイイことやればやるほど、帰れなくなる」
「出身校に帰る、っていうのはやっぱり名誉なことなんですか？」
「人と学校によるだろ。
　あたしはプロのつもりだし特に最初の大学に、地元だとか憧れだとか思い入れがあるわけでもないので、尊重してもらえるならどこでもいくよー。
　そうそう、地元といえばさあ、くだらない話があって」
「ほいほい」
「なんか問題起きると、東大はアカデミック・ハラスメント、京大はセクシャル・ハラスメント、阪大は研究費不正流用なんだ。土地柄だろ？」
「あはははは。

　なんか地縛霊でも影響してんですかね」
「人間は意外なほど風土や気候に影響されるってことかな」
「俺大学行くとしたらどの学部行けばいいんですかね」
「大学行くつもりか。やめとけ。ヴィジョンが無いなら無駄だ」
「ありますよ、なんとなくのんびりする」
「今だって一緒だろう」
「ずっと一生そのつもりです」
「しょーがねーなー……いわゆる日本で言う文系理系どっちだ」
「文系です」
「文系は専門職キャリアパス以外ではなおさら必要ないと思うんだが……まあ酔狂で行くなら、次のうち何が社会で大切なものだと思うか、答えよ。
　１、秩序
　２、真実
　３、金
　４、人間」

「５、愛」
「はいトゥルーエンドルート決定ー。ヴォーカル入りスペシャルエンドロールが君を待っとるぞ。
　四択だ馬鹿者」
「辛気臭い選択肢ですねえ。『美』とか『おもしろ通販生活』とか『萌え』とか無いんスか」
「アホウ人類が何百年も練り抜いた選択肢だ、尊重しろ」
「その四つなら……まあ、しょうがなく、金」
「はい経済学部決定。
　昨日言ったように、金というか正確にはインセンティブ、だがな。ただ気をつけろ、経済屋は金を儲けるもの・ひと＝いいもの・ひとという致命的な間違いを二十四時間犯し続ける。両者にはなんの相関関係も因果関係もないのは、ふつうの生活を送る君にはよく理解できてるだろう」
「いい音楽と売れる音楽は別問題、ということですね」
「プロデューサー、編集者、セールス。こう売りましたどう儲けました、という話をしてる間はいいのだ

が、それを『よい』『スゴイ』『才能がある』と表現しだすとそれは『間違い』だ。連中の話のキモさはここに起因する」
「なるほど。肝に銘じます。
　えーっとじゃ、秩序、てのが法学部ですか」
「そうそう。社会に秩序があるのは社会システムがあるせいだ、と考える倒錯した連中が法学部へ行く。社会ができたからルールができたに決まってるだろ変態どもめ」
「人間は……教育学部？」
「人間が人間によってなんとか変化させられうる、と信じるおめでたい人たちが集う楽園パラダイスだな。タブラ・ラサなんて仮説考えた奴は猫も犬も飼ったこと無い世間知らずだ。四兄弟生まれた瞬間から全員性格違うっつーの」
「じゃあ真実てのが文学部ですか」
「あるわけないものをあると言い張る偏屈もしくは嘘つきが行く崇高な暇つぶし機関だ。最高すぎるぞ。大昔の中東の大工の息子に嫁が居たか居ないか、人生すべて磨り潰して考察するんだ。ヨダレが出そうだろ

う」
「やっぱ金がいいかな。いちばんわかりやすい」
「とどのつまりは、なにをどう学習するにしても、
『もし、かくあれば』
という大前提が存在するんだ。で、その前提を満たすものを研究する。満たさないものは無視する。
　だから、それらの大前提のうち、比較的納得できるものを選ぶしかない。そして、前提を満たさないものを無視している、つまり盲点がある、ということを、議論の際は忘れないことだ。専門分野が違う相手と話が食い違う理由はこれだな」
「なるほど。
　でも、とどのつまりの話をすれば、人文系というぐらいですからすなわち『人間』を研究するのが文科系なんじゃないですか」
「まあそうとも言えるな。そこに斬り込むに何を切り口とするか、という分類だ」
「ラベルが間違ってるんですね」
「『経済』なんかどうだっていいだろう。『儲かる』学部の方が」

「いいなあ。行きたいなあ」
「美大とか行かんのか。
　……あ、いやいいわかった、私が悪かった」

　俺いま、そんな凄い顔してましたか。

「けして否定してるわけではなく、そういう機関へ行った方がよいジャンルの芸術もあります。種銭がすごく要るとか、設備が要るとか、何千年も積み上げられた技術をとりあえずは一から積み重ねないとダメだとか」
「だろうな」
「まあ俺の絵はそういうのではないので……むしろそういうのを真摯にやってる方々に舐めんなと言われそうです」
「箔つけとくのは悪いことじゃないぞ。だいたい世間なんざツラ構えとせいぜいスペックシートしか見とらんからな」
「いやあ」
「師と研究仲間というのも、在野では得難い」

「自分以外はみな師匠、友と呼ぶのは花、鳥、風、月」
「絵については謙虚なんだな。いいことだ。
　あれだ、マンガとか描いたりせんのか。儲かるんだろ人気作家になると」
「どうも俺、オタク的な素養が実は無いっぽくて、『これがキャッチー』てのがわかんないんですよねえ。アニメで一番好きなのは『プリキュア』なんですよ」
「違いがよくわからんが」
「『プリキュア』は親鸞ですよ。真の芸術です」
「はあ。
　いや別に、写実的な方向でもいいだろ？」
「模写ならできるのでこないだ描いたら漫研の友人にえらい褒められたんですけど……俺自身はどこがどういいのかよくわからず」
「コピーが巧いならアニメーターはどうだ」
「飽き性なんです。一枚だってヒーヒー言いながら完成させるのに」
「そりゃダメだな」

「まあ絵は死ぬまで趣味に取っておこうかと……」
「もったいない。そこそこイケてると思うぞ。見ると『ん？』と思うからな。あの玄関の絵でも」
「絵の神様に必要とされれば、お呼び出しが来ますよ」
「そうかな。
　コピーと言えば、まあ日本文化はコピーとそれを換骨奪胎して自家薬籠中の物にするのがうまい」
「よく言われますね」
「中国文明と西洋文明、大きく二回大成功してるからな。そのタミル文化も入れれば三回かもしれん。成功体験というのは呪いのように引きずるもんだ」
「いまだに『ものづくりニッポン』とかほざいてますからね」
「日本製スマホのシェアがどれぐらいあると思ってんだ。正気か」
「家電も終わってますしね。カメラも市場がおそろしい勢いで狭まってますし。あとはクルマぐらい」
「それだってわからんぞ。電動化と電脳化に果たしてついていけるかな」

「ムリっぽいですねえ。人材が足りませんねえ」
「まあ、トヨタやホンダはすでに『日本の会社』なんて言うほうがおかしいんだが」
「いまそういうのわかんなくなってますよね」
「アメリカだってGoogleやAppleやAmazonからちゃんと税金取れてねーんだ。いま言ったような話は無意味な話かもしれん」
「そういうのって、網掛けられないんですかねえ」
「とりあえずいいアイデアは無いな。
　国際帳簿みたいなのをブロックチェーン技術で完全に透明化すれば、あるいはわからんが、それも『できる・できない』じゃなくて『する・しない』だ」
「みんな同時にやらないと不公平ですもんね」
「税金の問題は今に始まったことじゃなくて、太古の昔から取る方と取られる方のいたちごっこはある。ただあまりにも大規模で異様に精密な話になってしまったんで、もう誰も本当のところ隅々までわかってないんじゃないかな」
「そうかもしれませんね。目の前のちいさな業務を日々こなすだけで」

「勝者も敗者も無いな。
　使えきれん金を握っても、持ってるケータイはそのへんの貧乏人が握りしめてるのと同じiPhoneだ」
「ディズニーランドやUSJで遊んで、『パイレーツ・オブ・カリビアン』の新作を楽しみにするんですよね」
「多様性があるような無いような……
　ほら、これ昔の本だが、『彦根高商』からの移籍とある」
「彦根高商、ってどこですか？」
「彦根高等商業学校はいまの滋賀大学経済学部だ」
「彦根高等商業学校の方がカッコイイですね」
「そうだな。神戸大学も神戸高等商業学校。筑波大学は東京師範学校、一橋大学は東京商科大学、昔の名前の方が特徴がわかりやすいな」
「ホントですね」
「さらに昔に遡れば、東京外国語大学は天文方蘭書翻訳局蛮書和解御用。あるいは熊本大学は藩校再春館、大阪大学は緒方洪庵の適塾だから、この両者は医学部の伝統が一目瞭然だ。
　水俣病の時に熊大医学部は昂然と東大医学部に異を

唱えたんだ。時と歴史の育んだ矜持のなせる業だよ」
「名前戻せばいいですよね。
　藩といえば今でも藩とか旧国名の方がしっくりくる地方がありますよ」
「ほう」
「たとえば青森だと、津軽地方と南部地方はかなり違うらしいです。青森県人同士でもそこが違うと同郷って気がしないそうですよ」
「ふーん」
「兵庫なんて摂津・丹波・但馬・播磨と淡路に、美作と備前までちょっと入ってます。７カ国にまたがるからヒョーゴスラビアなどと呼ばれて」
「なるほどな」
「その昔は税収や行政効率の面からしょうがなかったらしんですが、いまはもうそのへんはなんとでもなるので、旧藩や旧国名ベースで組み替えればいいと思うんですけどね。わかりやすいですから」
「緊急性が無いからな。
　そういう、地元の感覚を大事にしたくなる頃には田舎が廃れて人口も活力も無くなってるしなあ」

「そういうのが減ってるからこそ郷土愛を高める工夫をしないと」
「んー……」
「あれ、あんまり納得してませんね。さすがグローバリスト」
「根無し草からすると、どこでも住めば都って感じかな。また年をとると変わるのかもしれんが」
「ここはどうです？」
「悪かない。だが離れがたいほど良くもない。ふつうかな。
　ああ、いいところといえば電車に1時間も乗ればいろんな景色が見れるところかな」
「アメリカ人らしいご感想」
「わが祖国ながらあればっかりはゲンナリするな。
　日本の通勤ラッシュも酷いもんだが、クルマで茫洋と1時間、往復2時間ハイウェイ走るのも結構苦痛だぞ。貴重な人生の時間を」
「そりゃ自動運転も流行りますね」
「まったくだ」

　先輩はパタリ、と本を閉じると、積んであった十数冊かを丁寧に揃えて、ワゴンに移そうとする。

「やりますよ」
「いや貴重なものだから私が……ああ、頼もうかな」

　よっこいしょ、と。

「あまり良くない表現かもしれませんが、ここ、時間が止まってるみたいでなかなか素敵ですね」
「いや、時を止めるための施設、とも言える。褒め言葉だよ」
「人文系も、真剣にやると大変ですね」
「あたりまえだ。
　一生かけて基礎体力をつけ、先人たちの掘った穴の先を少し、削る。それでもそこに風が吹き込み雨が流れ込み時には地盤が崩落して、無に還る、どころか、新しい山ができたりすることもある」
「気合と根性ですか」
「そんなもんでもつわけなかろう。人文は運動で言え

ば遅筋。ウルトラマラソンだ。そのことなら『いつまでもやっていられる』という性能が重要」
「好き、ってこと？」
「いつまでもやっていられれば、その原因までは問わん。
　……満洲国という、かつて日本の植民地があってな」
「名前は聞いたことあります」
「いまの中国東北部にでっちあげられた傀儡国家だ。
　たとえば、これの研究を真面目にしようとするなら、日本語、中国語に加えて朝鮮語、モンゴル語、ロシア語にもちろん英語も要るだろう」
「聞くだけでぞっとしますね」
「まず関東軍という帝国陸軍の出先機関と密接な繋がりがあるので、『軍』というものに対して一定の理解が必要だ。それから、そこの産業を引っ張ったのが『満鉄』と『満業』という大きな国策会社。それぞれ鉄道と重化学工業なのだが、それらに対するある程度の知見も要るな。もちろん企業活動だから経済学的な知識もあればあるだけいい。そうそう、『満銀』とい

う中央銀行があって」
「ま、待って待って先輩、もう無理」
「なんだ、ここからがおもしろいんだ。金がいくらでも湧いて出てくる錬金術の話、聞きたくないか」
「それどうせ戦争中に日本が無茶苦茶やった話でしょう？　いいですよそんなの単に『無茶苦茶』っていうだけなんだから」
「まあまとめてしまえばそうなるが。
　とまあそんな具合に、たいへんなんだよ、文系の研究者っていうのは」
「一生懸命やっても、あまり顧みられそうにも無いですしね……」

　近くにあれば入り浸りたい素晴らしい施設だが、おそらく平日オンタイムも閑散としているだろうことは容易に想像がつく。

「いや、この書物のように1000年後の若者が目を留めてくれるかもしれんぞ。運が良ければ、な」
「タイムマシン作ってるみたいですね」

「言い得て妙だな。作文の才能もあるんじゃないか」
「だからさっきから言ってるでしょう。絵以外はそこそこイケてんですよ」
「ふふっ」

　ぽん、とひとつ積み書籍の表紙を優しく叩いて、ワゴンを押し始めた。代わる。

「……さて、寿司か」
「いやっほうい」
「80の爺さんがまだ板場に立つミシュラン星持ちと、回るけどちょっと高いとこ、どっちがいい？」
「回る方。寿司はファストフードですよ」
「私もそう思う。
　ところでソー」
「ちなみにツカサって読みます、って言いましたっけ」
「楽しめたか」
「ええもう。『イケイケ魔法使い』のアトラクションぐらい楽しめましたよ。4900円で別売りのヒロインの

杖持って乗り込んだぐらいに」
「テーマパーク詳しく無いからそれが楽しいことのか皮肉なのかわからん」
「あいや、猛烈に愉しんだ例えです」
「ならいい」

　先輩はご老公に丁寧に礼を述べ、門を出ると猫のようにひとつ大きな伸びをした。小さな背中が大きく見えた。人には居場所がある。

寿司屋

　回る寿司屋さんは店外に長い行列ができるほど大繁盛していた。
　もちろん予約済みなのでスルスルと通る。
　ぼく小心者なんでこういう時ほのかに罪悪感に苛まれるんですけど、先輩は計画性のない愚民どもの列に一瞥もくれない。USJやTDLでもカードの優先ラウンジとか活用して、待ち時間なしで人気アトラクション乗るタイプだな。ちなみにぼくは並ぶぐらいなら乗らないタイプ。

　丁寧な接客、清潔な店構え、わかりやすくてテンションのアガるメニュー黒板、そしてカウンターの前に注文用のタブレット。レーンにはもちろん、凝った手業の華やかな御寿司様たちがその彩りを競う。
　いいですねぇ。
　これ考えた人いつも天才だと思う。食をエンターテイメントにする。こういうのをイノヴェイションとい

うのだ。

「いやー、美味そうですねー」
「最近流行りの産直系で、北海道は函館から来てる。サイドメニューの味付けや種類の品揃えで多少ツッコミどころが無いわけではないが、おおよそ美味い」
「見るからにわかりますよねお寿司はね。
　先輩はビール？」
「いや、私は飲まん」
「あら、ダメな口ですか」
「いや、昔ファインマンて物理学者の本読んで、ナイトクラブで7up飲んで研究してたって姿がカッコよくてな。飲まないことにした。もちろんソーは好きなのいけ」
「いやいや、自分だけてのはうまくないもんです。俺もお茶にしよっと」
「変な気は使わんでいいのに……
　だがビールも正直合って無さそうだな」
「そうなんですよ。お寿司って難しくて、ビールはもちろんですが日本酒や白ワインも相性が厳しいです

し、蒸留酒はもっと……何飲めばいいんでしょうね？」
「なんだろうな。刺し身ならなんでもいいのに、不思議なもんだな」
「そうですね。
　意外なところでは、イカの塩辛に赤ワイン、って凄く合うんですよ。あと数の子と赤ワイン」
「ほー。今度やってみるよ。
　さあ注文しろ」
「へーい。
　じゃまずタマゴ、ゲソ、ツナコーン」
「しみったれた注文だなおい！！　まず美味い方からいけ美味い方から！　腹減ってる一番美味しく感じられる時に一番美味いもんだろ！」
「先輩俺のゲソになんて失礼なことを言うんですか。値段は味に関係ない！　俺が一番好きな寿司ネタは、シーチキンですよ！」
「だから脂で煮る前のツナをまず食え！」
「先輩にはまず干瓢巻という日本文化の粋をですね」
「要らん！　もういい私が注文する！！」

「……レーンからゲソ、ゲットだぜ」
「戻せ！！」
「食べる、食べるから」

　揉み合うわしら。高校生バカップルがイチャイチャしてるみたいではないか。

「……先輩は好きなものから食いつくタイプですね」
「貴様は最後に残しておくタイプか。人生損をするぞ」
「最期死ぬ時に笑ってるもの勝ちですよ、人生」
「ふん。
　おすすめ三昧にトロ三昧に贅沢三昧に産直三昧……」
「あああ情緒もへちゃらもない」
「ガイジンだからな。空気も漢字も読まん」
「読んでるじゃないですか。俺のも頼んでもらえます？」
「ゲソ三丁な」
「うなぎ、煮穴子、ハモ」

「なんで長くてヌルヌルしてるものばかりなんだ」
「長くてヌルヌルしてるからですよ、うえっへっへっへ」
「それ以上どんな精をつけるってんだ」
「大地の精霊とか大空のしぇーれーとか、いっぱい居ますよ味方につけたい精は。あと精・YES」
「余計なものばかりだな」

　アホウなことを言うていると「お待たせしました！」とどんどん運ばれるトロ、うなぎ、生ホタテ、炙りサーモン、活カンパチ、数の子、塩辛。
　やばい。

「……こちら赤ワインになります」
「どうぞ先輩、瞳に乾杯」
「食い合わせるとただならず旨いんだろ。心置きなくやってくれ」
「……すみません嘘です、生臭くて飛び上がります……」
「どうしてそういう嘘をつくの？　ツカサくんは」

「ぎ・やーーーっ！
　ど、どこでその、その女の女の真似を真似を真似を」
「きしししし、似てたか」
「心臓が氷の手で掴まれましたよ。だからどうやって？」
「副会長、ファンが多いんだぞ。私の耳にも風のウワサに流れてくるわい。すぐ検索・調査・研究・修練した」
「あー心臓に悪い、心臓に悪い」
「なんだ、浮気だからか」
「なに言ってんですかんなわけないでしょー、そいつがそうやって笑わない微笑みで甘ったれた声出したあとはホントウにやばいことしか起きないんですって。みんな、みんな山葉春の本当の怖さを知らないんだ……」
「『しあわせ』ってなんだろうな」

　唐突に聞かれる。
　先輩のお箸はトロのネタを醤油皿にどぼんと落とし

……ああ、ぎこちない。

「手で摘みませんか。寿司はそれに限りますよ」
「初デートの男子の前だ、お行儀の良いところ見せつけたいだろ？」
「まだそんなこと言うー。手触りも味のうちですよ」
「そうしよう」

　ちょんちょん、ぽいっ。
　……うん、うまい。もんくなし。

「……これですよ、『しあわせ』とは」
「うまいメシか」
「とびきりの美少女と一緒にね」

　ウインク。

「……私が悪かったよ。ほんと悪かった。ふつうにしてくれ。大トロ食うか？　もうひとつ頼むか？」
「先輩本当に失敬ですね。俺のウインクは熱帯魚も淋

しがるぐらい破壊力あるでしょう？」
「てめー中途半端にイケメンだからそういうイケメンがやる仕草すると生々しいんだよ、パチンコ屋の営業に来てる1.5流俳優みたいな世間からも浮いてるけどさりとてオーラもない。客のおっちゃんたちもどう反応していいかわからない」
「そこまで言わんでええでしょう。
　だからつまり、人間だって動物なんで、ツガイとエサですよ。この二つ揃ってたら、まあ、『しあわせ』」
「低次元……という言葉は日本語では印象が悪いのか、えー……ロー・レヴェルだな。階層が肉体に近い、という意味で」
「先輩はまだマズローの欲求五段階とか信じてる旧大陸の旧教徒ですか。そも身体と精神を分ける考え方をいいかげん捨てなさい」
「二分法に限界があるのは十二分に承知しとるが、とりあえず効果が高いんだから行けるところまではこれで行きたいだろうが」
「昨日話に出た俺のおじさん居るでしょう」

「ああ」
「ついこないだ、44で結婚しましてね、もちろん初婚」
「ああそれはめでたい。
　なんぼか包まなあかんのか」
「いやとりあえず距離遠いからいいです。
　で、丸くなりましたよずいぶん」
「シンプルだなまた」
「本人も最近口癖みたいに言うんですよ、『こんなに落ち着くならもっと早く結婚すればよかった』って」
「昔から願望はあったのか」
「あ、それがね、無い人だったんですよ。趣味人で、若い時からローンでBMW買って古くなってもずっと乗ってるような人で、『まあいいご縁があればねー』みたいな構えだったんで、ウチの父も『あいつぁ独身のままかなぁ』とか言ってたんですけどね」
「ふーん」
「それ見て、パートナー、って大事だなあ、と。
　本人が言うには40越えてきますとね、やっぱりこのまま独りで死ぬのかな、と思えてきて、まあ覚悟はす

るけど寂しいかもしれん、と」
「イメージに実感が伴ってくるんだろうな」
「だから極端にいうと妙齢の女性でなくても、日本だと難しいですが養子とか、シェアハウスみたいなところで、独身の友人と共同生活とか、とにかくそういう繋がりが欲しくなる、そうです」
「なるほどな。
　だからその話のもうひとつのポイントは、『本人は意識してなかった』って点だな」
「そうそう、そうなんですよ。これが浮名という浮名を流したプレイボーイとかならともかく、本とCDに囲まれてれば幸せ、と自分も周りも思ってた人なんで。わかんないもんです」
「なるほどな。
　うむ、そう思えば、メシもまた、たいせつだな」
「だいじですよだいじ。人間は食ったものからできてますからね。
　先輩なら野球の落合さんご存知でしょう、落合博満」
「ガンダム好きのおっさんか」

「三冠王三度の優勝請負人になんてこと言うんです。監督としてもリーグ優勝四度日本一一度」
「野球あんまり興味ないから」
「えっ。
　槙原のバックスクリーン被三連発をごぞんじなのに？」
「ゴシップとして好きなんだよ。スポーツとしては観戦テンポが牧歌的すぎる」
「それがビール呑みながらお茶の間もしくは安居酒屋でクダを巻くにはちょうどいいんですよ。
　とにかくNPBヒストリーベスト10に入れても誰からも文句の出ないレジェンドなんですけどね、彼が言うには、
『スランプといってもだいたい基本的なところに原因がある。ちゃんと眠れてないとか、ちゃんと食えてないとか』」
「なるほど。
　しかしそれはそのぐらい技術的に完成されてる人の意見のような気もするが」
「ビタミンB1が欠乏するだけで人間は死にますから

ね」
「確かに、あまりに情報が氾濫してるからな。
　ソーはなんか健康食生活してるのか」
「食べたいものを食べたい時に食べる」
「そうだろうと思ったよ」
「ダメですよお野菜も大切ですけど、肉食べてタンパク質も補給しないと」
「身体作ってるのはタンパク質だからなあ」
「そうです、糖質制限とか流行ってますけど、人間の基本のエネルギー源は糖質ですから！」
「うむ。
　私はあれは結構あやしいと思ってる」
「どう？」
「人間は栄養分を腸で吸収する。しかし腸内細菌のラインナップは人によって違う。だからある人にとっては糖質が苦手だったり、ある人はタンパク質が苦手だったり」
「牛乳だって飲むとお腹壊す人いますもんね」
「乳糖不耐性な。しかしタンパク質とカルシウムをあんなに簡便に取れる手段は他にないので、ふつうの人

には栄養食品だ。
　ちょっと話はズレるかもしれんが、健康というのもおそらくボトルネックを潰すという考え方が重要で」
「ボトルネック？」
「工場のラインを想像してくれ。
　工程がAからEまで5つある。
　A工程では1時間あたり100個できる。同様にBでは90個、Cで120個、Dで80個、Eで105個こなせる。
　とすると、そのラインから1時間に出てくる製品の個数はいくつだ？」
「あ、えーっと……80個？　ですか？」
「そうご名答。
　この際のボトルネックはD工程。D工程の能力以上の完成品はでてこないな」
「そうですね」
「じゃD工程を改良して150個作れるようになると、今度は？」
「えー、Bがボトルネックになるから……90個」
「じゃあ次に改良するのはB工程だな」
「はい」

「という感じで、睡眠とか栄養とか暴飲暴食とか運動不足とかストレスとか、どこか一番大きな問題点がその人の健康を規定していると思う。
　だから、たとえばだが、仕事で巨大なストレスを抱えているのに、有機野菜満載の健康定食食ってても、健康にはなれん」
「なるほどなるほど。その場合、添加物とか恐れてる場合じゃないですね」
「もちろん避けられれば避けた方がいいが、その前にやらなきゃならんことがある。
『ボトルネックを見つけて潰す』は仕事や学業、組織論でとても有効な考え方なので、覚えておくとよい」
「はーい。
　ま美術部の場合、局長がボトルネックでもありオープンワイドでもあるんですが」
「むしろソーがなんとか締めてるって感じだな。
　まーだから、細かいこと言わず『食べたい』と思うものを食べる、というのは究極の食養生かもしれんな。ただし食事には」
「情報を食ってるって面もありますね」

「そう。
　この寿司だってわざわざ『どこでどう獲れたなに』と書いてあって、これも消化・吸収してるので」
「脳の欲するものと、身体の欲してるものは、違う可能性がありますね」
「てめーの叔父上ではないが、サバが欲しいのにイカを食べてたかもしれん。現代人は、脳がリードしてるからな」
「うーん。
　……で、なぜ突然『しあわせ』なんですか」
「ハモくれ」
「どうぞう。ここはいいですね、梅肉に加えて酢味噌もちゃんとある。蝦夷地者にしてはわかってるじゃないか」
「白地に、赤と黄色のワンポイントが美しい」

　ぽん、と口に放り込む。

「骨切りもいい塩梅ですね。グローバルな時代だなあ」

「なんでもどこでも食べられるようになるのがいいかどうかはわからんがな。
　……AIの研究してて、やっぱりいつも頭の片隅にあるのが、
『これは本当に人間をしあわせにするのか？』
という疑問だ。これまでの機械やコンピュータのように、単純労働の肩代わりだけ担うわけでもないからな」
「自動運転とか言い出すと、クルマの運転が好きな人寂しいですよね」
「まあ、そういうことだ。
　なにが、人間のしあわせの源泉なのか。
　そこを触らないようにするか、触ってなお邪魔しないようにするのか、むしろブーストするように働くのか、方向性はわからんが、とにかくそこを尊重せねばなるまい」
「……素人の俺がボンヤリ思うだけなんですけど」

　煮穴子のはみ出た部分を箸で摘んでいただく。
　うん、ふんわり。

　ここ旨いな。

「ツガイとエサが根源のしあわせだとしたら、そこにはAIの入る余地、無いですよね。触れるのは自分の身体感覚だから」
「どうかな？　むしろそこが根源なら、ヴァーチャルなものでなんとかしようとする圧力とか欲求、ドライブは強いぞ」
「まあVRもまずポルノから入るんですが……
　それでも結局、そこが安定してると、『ふしあわせ』には陥りにくいと思うんですね。で、多少消極的かもしれませんが、『ふしあわせ』でなければ、『しあわせ』だ、と」
「まあ同じこと言うが、『戦争が無いのが平和』という定義もできんことはないな」
「そうです」
「ではむしろそこんところを適当に与えて、あとは特権階級がやりたい放題だ」
「最悪それでもいいような気がしますね。
　現代社会では、その人達が持つケータイは所詮

iPhoneですよ。10年前のベンツより、最近買った軽自動車の方が自動ブレーキの性能いいですからね」
「うーむ」
「世界中で格差社会やタックスヘイブンの税金逃れが問題化してるのは、つまり食えない、食いづらい人々がいるから不満が爆発するわけでしょう。それって単に再配分の問題にすぎないじゃないですか。むしろ、AIの出番ですよ」
「そう思ってやってるんだがな。それが人の世ではなかなか実現できん」
「全体パイが少なければ奪い合いかもしれませんが、パイはもう十二分に大きくて、しかも加速的に大きくなってる気もするんですが……」
「どのへんでそう思う？」
「エネルギーとか。太陽電池パネルって、あれ一枚置いておくと何十年も延々と電気生んでくれるでしょう？」
「まあパワコンの寿命とか細かいとこはあるんだが、いまんとこ寿命はパネルそのものより、鉄枠の腐食とか、陳腐化による論理寿命の尽きの方が早い、つまり

半永久だな」
「しかも欧米や中国ではアホみたいに値段が下がってるらしいじゃないですか。かたや省燃費技術もどんどん進んでるし、そもそも産業構造がモノからサービス方面へシフトし続けているんで、つまりもう、あれバーッと敷けばエネルギーは要らない」
「シェールガスもざばざば湧いて出てるしな」
「エネルギーが、タダになったら、大きいですよ。食料も安くなりますよね」
「そりゃそうだな」
「価格の下方圧力は強まり続け、逆に市場はもう飽和寸前ですよね。アフリカの人たちだってピカピカの高速道路でBMWに乗ってコカ・コーラ飲みながらiPhoneで会話してる。
　もう要らないんじゃないですか？　なにも」

　先輩はちょっと目を虚空に泳がせて、湯呑みを上から包んで茶を啜る。

「先輩、その持ち方おっさんくさいです」

「そうか？」
「ゆるふわ系女子としては、こう右手でもって、左手は下から支えて」
「ふむ」
「ちょっ、と飲んで、『おいし』」
「オレをどうプロデュースしたいんだ」
「天才美少女博士」
「そのままだろう。あいかわらずクリエイティビティが無いな」
「そこはAIが考えてくれるに違いない」
「……フィジカルな面ではそうかもしれんが、メンタルあるいはロジカルな面もやはりあると思うな。『しあわせ』には」
「そうですかねえ。
　考え過ぎ、というか思い上がりのような気がしますねえ。
　人間なんざ、自分が思ってるよりすっからかんなもんですよ」
「シニカリズムとオプティミズムはぐるっと回ってくっつくんだな。ソー見てるとそう思うよ。

　どう言えばいいかな……
　そうだな、時折『相克』が生じるだろうが、生きていれば」
「難しい言葉知ってますね」
「バカにするなよ、半分日本人みたいなもんだからな。
　矛盾といってもいい。とにかくAという状況とBという状況に挟まれた時、これで人は悩む」
「義理と人情を秤にかけるんですね」
「そうだ。
　これを超越しないと、『しあわせ』とは言い難い。
　義理を立ててひとでなしと罵られるのも辛ければ、人情にほだされて不義理を働き男を下げるのもまた辛い」
「それはどっちか諦めるしか無いと思うんだけどなあ……」
「まあ、おまーはそうかもしれんが」
「結局だいたいのことって、そういう具合に『全部欲しい』って言い出すからぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ悩んだりのたうち回ったりすることになるんですよ。

　ひとつ。
　一点だけどうしても欲しいものにフォーカスして、あとは我慢する。これで」
「じゃあそうしよう。
　ソーがある女子に惚れて、モノにしたいと。しかし振り向いてくれない。どうだ」
「振り向いてくれるまで、死ぬまで想い続けますよあたしゃ」
「言うね」
「……というような、どうしてもフォーカス当てたい女子が現れれば、ですよ。そこまでいかなきゃフツーに諦めまっす」
「どうやって諦める？」
「いや、まあそりゃ……絵を一心不乱に描いたり、海に叫んだり、親友とキャンプファイヤーを囲んだり」
「つまり気を逸らすわけだな」
「忘れられるまでね」
「受け入れることができなければ、無いものとするしかないな」
「いや、それは二分法過ぎる。

『そこにあるけど、気にしない』
という佇まいは、ありえますよ」
「ありうるのかなそんなことが」
「ウチに猫がいるんですけど、猫に首輪をしますよね」
「ああ」
「野生ではありえないものだし、本人にはなんのメリットもない邪魔なだけのものだと思いますが、ほとんどの猫はそのまま『気にしない』ようになります。受け入れてるとも、無いものとしているとも違う気がする。そんな感じで」
「うーんー……
　微妙な違いがよくわからんのは、私の育ちか性格か、言葉がネイティブではないからか」
「ブリとカンパチとヒラマサは違うんですよ」
「同じだ。口に入れば」
「結局のところ、だいたいの心の動きって訓練というか練習によって多少はコントロールが効くようになると思いますので、
『これはおいといて』

を続けていればいつしかどんなことも『おいておける』ようになりますよ」
「じゃあ切り札を切ろう。
　人間は、いや生き物はいつか死ぬのに生きている。
　なぜだ。
　この絶対矛盾こそ不幸の源泉ではないか」
「いつか死ぬから、生きるんじゃないですか。
　ずっと生きてるなら、生きてなくてもいい」
「つまり主体的に生き暮らすことに積極的に関わりを持つ、という点で？」
「まあまあ、そういうことなのかなあ。
『いつか死ぬ』かどうかも、本来はわかんないわけです。俺にとっては一回目の生であるわけだから。もちろん大変にその確率が高いことは納得していると言っても。
　いまこの瞬間からみれば、それは明日の予定と変わらず『なにが起きるかわからない』の範疇にあることなので、『気にしない』しかないですね」
「言わんとすることはよくわかるし、『いまを生きる』が充実した日々をもたらす心の持ちようだ、とい

うのも承知の上で、しかし人間には想像力というものがあってだな」
「想像力は、使い所をわりと自分で決められますよ」
「……ああ、そこがおまえさんらしいんだな。
　普通は、ふいに立ち上がってくるもんだ」
「じゃあそれは練習すればいいんじゃないですかね」
「どうやって？」
「うーん……座禅とか？　最近はマインドフルネスとか言うんでしたっけ。メディテーションにヨガに……別になんでもいいと思いますけど」
「うーん……
　その心を平らにしてやるべきことひとつに集中する、というのはどうも胡散臭いんだよなあ……」
「わかります。俺もテンションカチ上げて駆け抜ける方なので」
「これはオレが誤解してるだけなのかもしれんが、谷が生じないようにペターッと均してしまえば、山も起きんよね？」
「山谷が生じるレイヤーで一喜一憂するんじゃなくて、その下にがっしり敷き詰められているもっと根源

的な生の歓び、『生きている』って実感を感じ取る訓練じゃないですか？」
「そんなこと、できるのか？」
「できる、ってことになってるから、今も世界中で修行の身の方々が何万人何百万人と」
「いや無理じゃないか、よほど天才的な才能を持ってる人でないと」
「そうですかね」
「絵で例えると、対象のイデアを抽出して描き込める人だろう。りんごならりんごを見て『なにがりんごたるか』を把握して再現する。
　そんなもん人類の歴史オールだってセザンヌにしかできんだろう。あとは記号のコピーにすぎん」
「記号のコピーでもいいじゃないですか、本人が『できた』と思い込めれば」
「それはさすがにひどい」
「じゃ親鸞だ。念仏行きましょう念仏。
　ただ『なまんだぶ』を唱えていれば、阿弥陀様がお救いくださる」
「救って欲しいわけではないんだ。乗り越えたいんだ

よ、その絶対矛盾を」
「乗り越え方にまで文句つけちゃダメですよ。
　ヘリコプターで山頂に降り立ってもエベレスト登頂です」
「山頂に立ちたいんじゃなくて、登山がしたいんだよ」
「じゃあグデグデ言ってないで登ればいいじゃないですか。途中で凍死しようと滑落しようと、いまやりたいのは登山なんでしょう？」
「登るからには登りきりたいよね」
「いやそりゃそーですけ・どー……」
「注文はいいか？」
「先輩どうぞ。俺は適当にレーンから取ります」
「鯛にヒラメ、それからトリ貝」
「炙りサーモンマヨネーズ、と」
「脂っこいもの好きだなおまえ」
「先輩に言われたかないですよ。あほら、炙り和牛が来ましたよ」
「肉は要らん。あ、あのザンギ、はんぶんこせんか」
「ご存じないかもしれませんが、あれは鶏肉を揚げた

物ですよ」

　順番や流れなんて関係ない。
　これが若さだ。振り向かないことさ。

「意味の前に暮らしがあるんです」
「それは真実だが。
　しかし現代は情報が溢れててな」
「遮断なさいよ、もうtwitterもFacebookも禁止。はいアプリ削除、ブックマークから削除」
「そんなことしてもくだらないwebを見るだけだ。さすがにwebの遮断はできんしな」
「昔の人だって、逃避先はあったと思いますよ。本とか酒とか博打とか、なんかわかりませんけど。それはもうつまり、そういうことを考えることを止める」
「想像力を止めろ、と？
　こんな強力な武器をか？」
「そっちへ向けなければいい、というだけです。
　誰も全部止めろとは言いませんよ」
「そんな都合よくいくもんかな」

「だからそれをみんな、訓練してるんじゃないですか？」
「……信じられん。
　何度このパスに入っても、そこで納得できん」
「人間は、変化し続けるものですよ。
　なにか相克があったとしても、自分の気分が変わったり、状況がふいに変わってしまったり、いろんな理由で時間の経過とともに解消されることはよくあることです」
「わかった。
　おれは『待つ』のが苦手なんだ。おまえと違って。
　主体的になんとかしたい」
「そりゃ天候や自然の移ろい、時の流れと同じですよ。
　自分なんてちっぽけなものでは到底コントロールできないもののほうが、僕らの身の回りには多い。
　あーやっぱり先輩は半分欧米人ですね。なんでもコントロールできると思ってる」
「うーん、そういうわけでもないと思うが……」
「近代的なものの考え方の弱点は、分割して要素に還

元して考えるのですが、『全体は部分の総和ではない』ので、その隙間に取りこぼしがどうしても生じるところと」
「そうだな」
「あとは、時間という概念があやふやで、物理現象を考える時のように交換可能もしくは考えないこととして無視するか、あるいは一方向へ同じステップで刻まれ続けると前提にしすぎるか」
「細かく言うといろいろ考えてる人はいるんだが、ややこしいので一般的には『とりあえずおいといて』という扱いにする」
「時の流れに従って、万物が流転し続けることを前提にものを考えないと、特に人間とか人生というものは理解しがたいと思いますよ。
　そういうものを考える時は、電子回路を組むときとは違うモードで考えないとダメではないですか」
「モードが二種類ある、という時点でもう受け入れがたいからな」
「一神教にだって、神様に抗う悪魔が居るでしょう」
「神という存在を際立たせるための脇役に過ぎん。

　間違っているから、正しきものが輝く」
「それでもそこに存在しているということは、役割があるということで、それはつまり、生きている、ってことですよ。ミミズだってオケラだってアメンボだって」
「いまは人間の話だ。メタに逃げるのは卑怯だ」
「卑怯なもんですか。子供が熱出して苦しんでる時に、もし効くのなら鰯の頭でもひいらぎでも使うでしょう」
「効けばな。万人には効かん」
「何％かの人に効けばいいじゃないですか。別に抗がん剤だって誰にでも効くわけじゃなし」
「どうもズレるな。
　ソーはしあわせになりたくないのか？」
「だからペニシリンみたいな万能特効薬を求めようって考え方自体が間違っている……が気に障るなら、有効ではないんですってば。
　いま、しあわせ、OK。
　それで」
「それでは学問にならん」

「だからなんにでも再現性が担保されているというその考え方自体がですなー」
「いや。話を最初に戻すと、私はAIがどう振る舞うかべきなのかを考えたいのであって」
「いまのAIって自分でなんでも考えてくれるんでしょう？
　いいAIなら勝手に考えてくれますよ、自分のしあわせを」
「……まあそういう言われ方をすると、二の句は継げん」

　ぽい、とガリを一枚口の中に放り込んで、頬杖をついた。
　ぽりぽりぽり……

「このジンジャー・スイート・ピクルスは美味いな」
「美味いですね。我が家でも母がいつも作りますよ」
「簡単に作れるのか」
「見りゃわかるでしょう、新生姜を薄切りにしたら酢と砂糖を混ぜた液にぶち込むだけです。簡単と言うも

めんどくさいほど簡単」
「ふむ。今度作ってみようか」
「先輩は一人暮らしですか。メシとかどうされてます？」
「外食かケータリングだな。あ、デマエっていうのか。あとコンビニ、ホカベン」
「自炊もやってみると意外とできるもんらしいですよ。叔父が言ってました」
「結婚したんだろう？」
「したので、作らなきゃいけなくなったらしいです。夫婦の分。それまでは、ばあちゃんがちゃんちゃんと用意してくれたので」
「晩婚化進むなあ、そりゃ」
「さっき言ったように趣味人なんで、それなりに楽しんでますけどね。道具とかいろいろ揃えて」
「それは幸運だ。オレはもう袋のラーメン茹でるのに鍋を出すって時点でめんどくさい」
「モノづくりの好きなお人とは思えない」
「好きなモノしか作りたくないんだよ」
「美味しい食べ物はお好きでしょう？」

「好きだが、そこまでのスキルを身につけるのに膨大な時間と労力が要るだろう」
「だからそれがあんまり要らないらしいですよ。なんか適当にいい材料をいい油と調味料で炒めれば、美味いらしいです」
「ふむ。まあ、考えてみるよ」
「凝ると美味しい料理を作りそうだけどなあ、先輩」
「ザッカーバーグが同じ服着てるのは、決断力を使いたくないからで」
「そんなだからFacebookのUIはクソすぎるんですよ。おしゃれの楽しさがわからん人間に、人の気持ちなんか理解できるか」
「あれは膨大なABテストに導かれた集合知……いややまいだれの痴、だぞ。ザッカーバーグのセンスが悪いんじゃない。おれたち人類のセンスが酷いんだ」
「他人のせい、特に客のせいにしてる時点でクソ・オブ・クソーズだ」
「まあ、選択と集中は重要だからな」
「そこで重み付けをする。重み付けとはつまり決断ではないですか。決断を避けるために決断する？　アホ

ですか」
「いやまあツッコミは入れようと思えばどうにでも入れられるので……」
「あ、手巻き寿司なんか美味しいですよ。なんたって好きな具を好きに組み合わせられますからね。うなぎ＆シーチキンがおすすめです」
「ひとりで手巻き寿司くるくる巻くのは若干の哀れみを誘うなあ」
「呼んでくださったら飛んで行きますよ。何人か連れて」
「まあ、様子を見てみよう。
　手巻き寿司パーティか。悪くないな」
「お寿司お好きですよね」
「これがな。
　オレ、貰われてって辛かったのが、母が食事にはいつも大盤振る舞いしてくれてな。いいステーキ屋連れてってくれたりでかいピザ取ってくれたりいろいろしてくるんだけど、どうも食べきれなくてね。施設の食事は、うまくはないけどバランス良く作られててさ」
「いや、なんかTVとかで見ますよ、1キロのステーキと

か。無理」
「大きくなりますように、元気になりますように、ってことだったんだと思うんだが。食べ残すともっと栄養ありそうなものがドーンと出てくる。そうやっていろいろしてくれればくれるほど、どうも食事が憂鬱で」
「そういう食い違いってありますよねえ。実の親子なら遠慮なく喧嘩もできようものを」
「うん。
　ところがある日父がNYに出張っていうので、観光兼ねて連れて行ってくれたんだ。で、父は日本生まれなもんだから『寿司行こう』って初めて食べたのがNYでも人気店。
　こ、れ、が、うまくて」
「ファーストスシがそれはインパクトありますね」
「夢のようだったよ。それまで茶色くてゴツゴツしたものに涙目で齧りついてばっかりいたところに、可愛くて色とりどりデザインも様々ならもちろん味もヴァリエーション豊富、サカナごとに違う食感にホロリと崩れるシャリのほのかな甘酸っぱさ……今思い出して

もドリームだ」
「よかったじゃないですか、ソウル・フードが見つかって」
「それが良かない。
　ウチの実家は適度に田舎なんで、いい寿司屋なんか無いんだ」
「自作」
「母が生魚がダメでね。それでもなんとか作ってくれたら、芯の残ったコメに鼻を刺激する強い酢、それにしっけた海苔。スシは都会の食べ物だよ」
「お寿司に吸い寄せられるように都会へ出てきたんですね」
「ところが出てきたら出てきたで、これ独りで食うもんじゃないな」
「ああ、そうですね。いけなくもないですけど、二人三人四人で食うとなおよし」
「だから今日は感謝してるよ」
「それは奢って貰った方のセリフです。
　……奢りですよね？」
「払うか？」

「いや、奢られます」
「デザートいくか」
「先輩どうぞ。俺はお寿司のお口で終わりたいです」
「じゃあ……マンゴープリン、と」
「あと煮穴子」
「長いの好きだな」
「できればヌルヌルしてるとなおいいです」
「オレはどじょうはダメだなあ」
「美味いですよ柳川鍋」
「東京で有名店に連れてってもらったんだけどね。さすがにあのヴィジュアルは厳しい」
「いいかんじのサイズ感ですからね。鮎ぐらい大きいか、シラウオぐらい小さいといいんですが」
「ワカサギの天ぷらならイケるんだがなあ……」

　やってきたプリンをつつく先輩。一口咥えて話し始める。
　これ先輩の癖だな。

「……つまんないTipsかもしれんが、『すべての悩み

は人間関係に還元できる』と考えて、相対評価を止めるくせをつける、とか」
「だから縮小均衡系は夢がないですねえ。
　心理的なものにせよ『隠者になれ』っていうのは解決策ではない」
「だが老年性超越、というのは基本そういうことらしいぞ。健康に多少齟齬があるのを気にしなくなる、とか、社会ネットワークが小さくなるのを気にしなくなる、とか、つまり外面、ソトヅラっていうのを捨てると、気持ちは穏やかになる、らしい」
「そりゃ『老人はそうであってもよし』という知識と経験がベースにあるからでしょう。ああいま諸先輩方と同じ、人生の黄昏フェーズに居るんだな、という安心感があるじゃないですか」
「あと曲がりなりにも長年生きてくると、自分の人生に一定の満足感も持ってるだろうしな。そうすると『他人は他人、自分は自分』と思いやすいか」
「そうですね」
「……案外ソーの言う、『ふしあわせでなければ、しあわせ』というのが当たらずといえども遠からず、か

もしれんな」
「抑圧を取り除くのがまず優先事項だと思います。
　先輩風に言うならボトルネックを潰さないと、運気の流れは滞ったままですよ」
「AIにそれはないので、てことはあいつらはしあわせか」
「それはわかりませんよ、彼らにもあるかもしれない。
　電力性能比でどこそこの誰々さんに負けている、とか」
「フッ。あるかもしれんな。
　確かに、人間は生まれもってしあわせなはず、なんだよな」
「赤ん坊は笑ってるでしょう。
　すくなくともふしあわせではないはずですよ。
　ふしあわせは、どこかで作られたものなんです。
　作られたものなら、排除したり解消したり、できるはず」
「……フッ。なんだか詐欺師みたいに言いくるめてくるな」

「セミナーを開催します！」
「組んでマルチ商法にでも手を染めるか」
「いまネットワーク・ビジネスって言うんですよ。
　いいですね、商材は何にします？」
「人形アンドロイドだろ、そりゃ」
「愚問でした」

　咥えたスプーンをくいくい上下に振りながら、先輩は呟く。

「……時が多くを解決するメカニズムは盲点だったな。なるほどな。自身と周囲の変化によって価値観も変化し、それにより不幸も幸福に転化する」
「もちろん逆もありますが」
「若いのになぜそんなことに気づいた。どっかで読んだか」
「いえ……
　まあ、俺、むかし、胸が痛いフラレ方をしてですね」
「おうきたきた、そういうのを待ってたんだよ」

「あら。食いつきますね。クールに流されるかと思った」
「オレだって女子だぞ、恋バナは中トロの次に好物だ。なんで今からなんだ、そんな重要な発表は頭か遅くとも中盤までにやれ。追加注文せにゃならんだろ」
「30秒で終わる話なんで、茶啜っててください」
「淹れてくれ」
「自分でやれるでしょこんなことー」
「スイッチが固ぇんだよ妙にー」
「はいはい……えーとこんぐらいの濃さで？」
「そんな入れると眠れなくなるだろう！？　おまーこれからおれに何すっ気だ」
「誤解すぎる。勝手に薄めてください。
　……まあ中学の頭で同じクラスになった子に一目惚れされてですね」
「かー、イケメンは辛いねえ」
「辛いっすよ。んでこっちもウブなもんですからおつきあいを始めたんですが、まあそうなんでもうまく行くわけはなくて、すぐフラレました」
「追いかけたのか」

「まあ……ちょっぴりだけ」
「相当やったな。ポリスメンは来たか」
「いや、そこが俺のいいところ悪いところで、なんとかギリギリその手前で収める抜群の抑止力を発揮し。いまでも『いいお友達』ですよヒャッハー！」
「ダメだなぁ。いけよブタ箱」
「他人事だと思って。俺が変な絵描いてるのはこのときの反動ではないかと思うんですが、とか自分で言うなよオラー」
「つらかったな。よしよし。
　まーそのあれだ、物の価値のわらかん女はきっとその、将来官僚にでもなりそうなガリ勉君と幸せなつもりで暮らしていくんだろー。気にすんな」
「なぜそこが読めたんです。
　俺から見れば『そいつと俺なら俺だろう』というようなスカタンに負けた事実を」
「『胸痛い』言うのになんら具体性が無いから適当にヤマ張ったら当たっただけだ。
　女は現実的だからな。あんたみたいな夢見がちボーイに引っかかるのは……度胸が要るんだよ」

「度胸」
「行けると踏んで近寄ったら予想以上にドリームを生きてたから撤退したんだ。そんなピーキーな自分を誇りに思え」
「慰めてくれてんですか、塩塗り込んでくれてんですか」
「りょーほー。けしししし」
「くそう。
　まあ、とりあえず、大失恋すると、ぽかーん、て感じで、胸に巨大な穴が開きますよね」
「開くな」
「人間、あまりなことが起きると、悲しくも辛くも無いんですよ。ただ、ぽかーん、て感じで」
「わかるよ。私の両親の事故の知らせ受け取った時も、そうだった」
「そうですね。
　……ただですね！」
「よしきた」
「おかげさまでフレッシュな気持ちで高校生活に挑むことができまして。局長に気に入られたり、まあ春や

ランみたいな愉快な女友達もできまして」
「向こうはそう思っとらんがな」
「はい？」
「いや。
　で、私とスシデートもできる、と」
「そおですよこれ僕フリーだからこんなとこでニコニコしてられるんですよ。彼女でも居たら断って持ち帰りだけ奢ってもらうコースですよ」
「寿司は食うのか」
「ということで、時が経ちいろいろなことが変化すると、ふしあわせもしあわせになる、こともある、ので、そのことに対する理解というか、場馴れというか場数というか、そういうのがあると、先輩の言葉で言うところの『相克の超越』がしやすいですね」
「だがすくなくとも一発はそういう、大波に洗われて転覆せんといかんな」
「宗教的な回心の瞬間っていうのはだいたい底のあとにくるじゃないですか。お釈迦様が厳しい修行のあとスジャータさんにおかゆ貰ったり、フランシスコ・ザビエルも若い頃はSMまがいの縄プレイに夢中だったそ

うですよ」
「縛られると、神を感じるのか？　完全に変態じゃないか」
「SMは市民権得てる標準的な性癖ですよ。変態とは失礼な。
　じゃなくて、身体の自由を効かなくするのがポイントなんでしょうね。だいたい宗教修行というのは肉体いじめてトランス状態を惹起させるテクニックが多いので。こないだweb見てたら『君の縄。』っていうAVがあってですね。それに『前前前立腺』て歌も。あっはっは」
「話を戻せ。
　なんで性癖の話そんなに嬉しそうに語り尽くすんだ」
「ま、なんでもそうですが、ガチョーンという瞬間は、次のしあわせへのチャンス、という真理をですね、若者には伝えていきたい」
「ソーの語りはなんとなく説得力がねーんだよな……
　言ってることは極めてまともなんだが、なんか詐欺に合ってる気がする」

「ニコニコ笑ってるからですかね」
「それもある。が、いつもひとつ上のレイヤーから俯瞰してるような気がして、身体感覚が希薄なんだよ」
「そんなことないですって。自殺だって考えたんですよ」
「どんなふうな」
「いやそりゃ……いま隕石が落ちてきて死ねたら楽だな、とか」
「それは自殺企図とは言わん。
　まあまあ、しかしそのへんは人によるので他人が判定したりしていいものでもないが。
　……すまんな、ソー。痛い話させて」
「自分が勝手にしたことです。先輩に身の上話させちゃいましたしね」
「自分が勝手にしたことだ」

　くすっ、と笑った。
　お養父さんお養母さんは、間違いなくしあわせだった。

――店を出ると、まだ並んでいた。人気店も辛いもんだ。

「……のんびりしましたね。帰りましょう」
「あー……オレ明日ここひとまわり散策すっかな。泊まるわ」
「ああ、それもいいですね。って、この観光都市で宿いきなり取れるもんですか？」
「じゃーん。見てろ、マニー・パワーを」

スマホを取り出すと電話を掛ける。

「……あもしもし晴井ですー。あのね、いまここにいるんだけど、『インペリアル』部屋ある？　……あ大丈夫？　……うん、ひとり。あちょっと待って。
……泊まるか？」
「めっそうもないです。ママのスカートの中に帰ります」
「……ひとり。シティビューなんか要りませんって。ジュニアスイート？　いいですよ。じゃあ、そこで。

あといつものもおねがい。……はい。あ、すぐいきます。
　……とまあ、こんな感じで」
「高いカード凄いなあ。そんな手当もやってくれるんですね」
「年間数百万の会費はほぼコンシェルジュ代だ。それでも有能な秘書雇うこと考えりゃ安いもんさ」
「だって普通の部屋はもう三ヶ月前からいっぱいと聞きますよ」
「枠があるんだよ。同じ泊めるなら高い客泊めた方が儲かるからな。ホテルの部屋はウニと同じく、時価だよ」

　歩き出す。件のホテルは駅前そびえる好立地、ほんの数分だ。

「ひとり暮らしも気ままでいいですね」
「まあな。しかしたまにふと話し相手が欲しくなることもある」
「先輩でもですかあ？　本や論文やネットで十分時間

潰せそうですが」
「飽きるんだよ。人間相手の双方向性にはかなわん。どんな相手でも、どんな話でも」
「お相手務まりましたか」
「寿司分ぐらいは」
「先輩のAIがその役果たしてくれるのも、もうすぐでしょう」
「そうなったらそうなったで、人間の相手を『天然』とか言って喜ぶんだろうさ。寿司ネタみたいにね」
「いまはヘタな天然より養殖の方が美味いですよ」
「研究者としてはそうなって欲しいが、人間としては若干抵抗があるな」
「まあ。『要らん』って言われてるようなもんですからね」
「さっきの老人の超越じゃないが、社会性を失っても、人はしあわせに生きていけるんだろうか」
「もちろんですよ。
　そういうことと、生きるってことは、おそらく、別ですよ」
「ふむ」

「『愛を信じられないなら、愛なしで生きてごらん。
　世の中を信じられないなら、世の中を信じないで生きてごらん。
　人間が信じられなかったら、人間を信じないで生きてごらん。
　生きるということは、恐らく、そうしたこととは別ですよ』
　俺が唯一暗唱できる詩です」
「誰のセリフだ」
「井上靖先生」
「大物か」
「もちろん」
「さすが言うことに重みがあるな。だが勘違いするなよ、それは一通り味わい尽くした人の言葉だ。愛を、社会を、友を。一旦手放して、また帰れ、ってことだ」
「放蕩息子の帰還ですか。確かに、ありがたみを感じるにはそれが一番ですね」
「まあ、オレは、やれることを、やるさ」
「それでいいと思いますよ。

　オッペンハイマーだってボーアだってフェルミだってフォン・ノイマンだって、そうやって明日を信じてがむしゃらに走ったんです」
「マンハッタン計画のメンツじゃねえか。
　イヤなこというヤツ」
「いまごろ気づきましたか」

　着いた。豪華な車寄せの端っこに、だが。

「……上がってくか。ジンジャーエールの一杯ぐらい出すぞ」
「いや、先輩もおつかれでしょうし、帰ります。
　ごちそうさまでした。じゃ」
「ああ。
　……ああ、ソー」
「ほい？」
「月曜放課後部室来てくれ。いろいろ見て聞いて、勇気と元気とやる気が湧いた。アイツを動かしてみせよう」
「アイツ？　あ、まさかあの先輩型ロボットですか。

うわーそりゃ楽しみだなあ。ぜひ」
「ん。
　じゃおやすみ」
「おやすみなさーい。よい夢をー」

　眠い目をこすりながらロビーへ歩いて行く先輩を見送った。
　堂々としてるなあ。慣れてるんだろうなあ。

　――快速電車はいまだに若干疲れ顔の観光客がたくさん居た。なんとか確保した扉前補助席で鞄を抱えて一息つくと、regretが襲い来る。

「あー……俺のバカ。なんでこんな超美味しいお誘い断るんだ、俺のバカ」

　アホウなもので、瞬時の決断がヘタクソだ。

「……ジンジャーエール、絶対美味いのに決まってるのに」

人間たち

　――怠惰な日曜が過ぎ、プチ憂鬱とプチ安堵の同居する月曜が過ぎていって、放課後。ロボット部のドアをノックする。

「……せんぱーい。本田、来ましたよー」
「はいれー」
「はーい。
　……あれ、ちょっと薄暗いですね。演出ですか」
「まーそんなところだ。
　部屋中央の椅子を見よ」
「ん……おおっ」

　そこには、例の先輩型アンドロイドが、パイプ椅子に座らされていた。目は閉じているが実に存在感がある。
　いやー本物以上に本物だ。

「あらためてゴイスー。モノづくりニッポン万歳」
「渾身の作品だからな。
　……えー、で、ちょっとした趣向としてだな。えー、あー、コホン、あー、もしソーさえよければ、なのだが」
「はい？」
「ん、んんっ、えー、眠り姫のお目覚めを、王子様のアレでナニで」
「アレでナニで？
　出会って4秒で Yes, We Can？」
「親馬鹿といわばいえ、娘みたいなものだから、はじまりはロマンティックにしてやりたい。童話のような、ね？」
「えっ。
　……まさか、お目覚めのチッスとかチウとかそういう？」
「まー、そのへんかな」
「えーっ！？
　え、いや、まあそりゃ、たいへん光栄なことでございまするけれども。いいんですかこんな野良犬で」

「自分で言うなよ」
「もしくは馬の骨。
　いや、それはホント嬉しいお役目ですが、いやホントにいいんでしょうね、俺なんかで？　あわかったドッキリ！」
「だいじょうぶだ、野呂圭介はスタンバイしてない」
「先輩ハーフっての嘘じゃないですか。純国産アラフィフおばさまの疑惑あり」
「いまはベンリTubeでなんでも観れるんだよ。
　どうだ、やるのかやらんのか」
「やりますやります。
　ようし。では早速。
　……え、えー……あ、いやあ〜、ロボットとはいえ、先輩のカタチしてると興奮しますねえ」
「ドキドキしたり恥ずかしがったりしてくれよ」
「それも興奮じゃないですか。
　ああ……た、たまらん」
「やっぱ止めようかな……」
「名前呼んだりしていいですか」
「もうなんとでもしてくれ」

「ん！　んんんんんん！　あ、あ、あ〜〜〜〜〜♪
　よしＯＫ。
　……僕の愛しの君よ。いまから生の魔法を授けよう」
「思いつきの前口上は要らん」
「生きていれば辛いことも悲しいこともたくさんあるが、しかしそれすらも時が経てばしあわせになることもある。
　まあ17年ぽっきりの先輩に過ぎないが、生きるってことは、しあわせなことだよ」
「さっさとしろ」
「では。
　……ディナ、お目覚めの時間だよ」

　む、む、むぅ〜〜〜〜〜〜〜ん……

「「ちょおおっと待ったあああああああああ！！」」

　あーなんか聞き慣れた声しかもハーモニー。
　がばちゃん、と扉が開いて立ちはだかる影二つ。

「金曜からコッソコソコッソコソ怪しいと思ったらやっぱり狩りに出かけてたんだ」
「まーたのべつまくなしやぶからぼうに撒き散らして。あんた故郷の川に遡上した鮭か」

　山葉春と鈴木ラン。
　我が校と日本の誇る原付コンビだ。
　早よ中国製電気スクーターに駆逐されろ。

「ちょっと待て、俺はいま、晴井先輩に任された重大な使命を完遂せんと欲す」
「催眠術かなにかで金縛りにしたいたいけな先輩の純潔を奪うのが？」
「薬だよぱるっぺ。ポン吉の汗煮詰めたら嗅ぐだけで気絶する液体ができあがる。こいつ全身ヘロモンでできてるから」
「人聞きの悪い。
　若干残念なことにこれはかの天才美少女博士・晴井先輩ではなく、先輩に似せたアンドロイドなのだ。機

械じかけの人形がいままさに生を受けんとする、その儀式に選ばれたのが俺の唇、俺の愛、ってわけだ。AIだけにね」
「ごちゃごちゃ言ってんとはよせんか」
「あ、はい、先輩それでは」
「もうキモいからホント止めて。学校でそんな破廉恥なことは。生徒会副会長として許可しません」
「……てかさー。ぽんちゃんそれマジで言ってんの？」
「俺はごぞんじのとおり真面目一本・生一本だぞ。マジでない時なんて人生にただの一瞬も無い」
「ホントかなー。
　せんぱ〜〜い？」

　ランは先輩型アンドロイドを覗き込んだ。ヤツもクリエイターの端くれ漫研副部長、匠の技に惚れ惚れ見惚れ……
　と、どこからか取り出した漫画家七つ道具のひとつ、羽根ホウキをふぁっさふぁっさ振った。アンドロイドの顔面で。

　てかおまえいい加減にデジタルで原稿やれよ。
　……と、ツッコむ間もなく。

「……びえーーーーーーっくしょい！」
「うわすごい！　くしゃみも人間そのもの！」
「ホントだ。思ったよりスゴイねツカサ」
「そこふたり。
　んなわけねーだろ！　これは」
「起動ーーーーーーー！！」
「「「わあっ」」」
「And・お目覚めの・KISS！」

　ちゅっ。

「「あ”！！」」

　目の前には自律起動を果たした先輩型アンドロイドがニタッ、と笑う。ああこれ土曜日によく見た表情だ。

……えーっ、と？

「……ツカサっ・くんっ！」
「あ、はい」
「ちょっと・こっち・向い・て！」

　と言われるが早いか、両手で頬挟まれてぐりん、と向き直されて、正面に春さんがおられ、て、

　ぷちゅっ。

「「ああ”っ！！」」
「……ぽんきちーーーーーーーーー！！」
「あいー」
「あああああああああああああああ！！」

　オタクってどうして勢い付ける時に絶叫するのか。春のキレのある体術と違ってランこちらは力づく、ぐりん、げばっ、まるで頭突きのように激しく強く勇ましく、

　ぶじゅっ。

「「あーーーーーーーー」」
「ちょっ、ちょっ、おさんにんさん、太平の眠りを覚ます蒸気船キスというものはですね、王子様から主体的にですね」
「とにかく！　この薄暗い魔窟を出るわよ！　ラン！」
「ほいきた！　青年は健全にアウトドアだぜ、ポンタ！」
「あいてて、わかった、わかったから手引っ張るな」
「ピンと来た！
　これが噂のジャパニーズ・ラヴコメディにおける『エチゼン』てヤツだな！？」
「いやその愛称はおかしい。あれは子をめぐる母同士の争いで」
「オレ一度やってみたかったんだ！
　こっち引っ張りゃいいのか！？」
「なんでそんな嬉しそうなんです！？」

「先輩だからって、やっていいことと悪いことがあります！　本人の意向も確かめずに、身体的接触を行うなんて、完璧なセクハラです！」
「いや、俺は、超ウェルカム」
「ぽんちゃん、いま君が受けてるのはDVだよ。愛じゃない」
「いや、まごうことなき、愛だ」
「はいはい、愛ならいくらでもあげるからとりあえずここを出る！」
「そうだよひとこと言えばなんぼでも浴びるほどあげたのに言わないから！　行くよウチの部室！」
「ちょっと。まず安全な生徒会室だよ」
「あーだめだめ、あんな辛気臭いところに長くいるとアレルギーが出る」
「漫研のジメジメした部室の方が蕁麻疹が沸くわ。
　さ、ツカサなにしてるの早く」
「てゆーかその名前呼び止めなよ馴れ馴れしい。まるで彼女みたいじゃん」
「昔からこうだもの。ね、ツカサ？」
「ポンちゃんはポンちゃんの方がかわいくていいよね

ー。ねーポンちゃん？」
「……あのう、そうこうしているうちにズルズルと先輩に引きづられつつあるのですが」
「「あ！」」
「ソー黙っとけよ！　なんだオレじゃ不満なのか！？この田舎に突然突っ立ってる観音像みたいなのと肉屋の店頭にぶら下がってるラードの塊みたいなのとだとオレが一番マシだろ！？」
「観音ぱわー！」
「背脂の力ー！」
「「せーの」」
「「おーえす、おーえす」」
「あー！　あー！　盗られるー！　盗られるー！」
「「盗ってるのはあなた／先輩ですっ！！」」
「だれかー！　だれかあるー！」
「……およびでございますかご主人様」

　川崎善二郎。俺の良き友にして、

「つまりこのままだと両腕・両脚がもげるから、あっ

しは首をもげばいい？」

　良きバカ。
　帰れいますぐ。

「川崎君こんど食堂で食べ放題やるから、いまは手助けして」
「ゼッツー、エロ本要らんか。腐るほどあるぞ。腐ってるヤツだけど」
「食い気も色気もいまは満ち足りてるなあ……」
「そこで人類への貢献だ。オレを助けると地球に優しいぞ」
「流行りのやりがい搾取ってやつですかい？
　よし、日本男児が金髪に弱いってところを見せつけてやりますぜ」
「バカー！」
「アホー！」
「褒め言葉ですなあ。
　では、せーの、」
「ちょっ、ちょっ善二郎、待て、待ってくれ、それは

あかん、それは、あかんて」

　善二郎はよせばいいのに先輩を後ろからがっしり掴んで、まるで大きなカブを引き抜くようにフンヌと力を入れた。
　格闘技諸々合わせて52段（競技かるたと書道・華道・香道などを含む）、最高速度400キロ、プーチン大統領もご愛用のカワサキ・スーパーチャージド・ラムエアシステムが火を噴く。
　インドア系女子3人と岐阜特産ピリ辛大豆もやしっ子の俺っちなど、ひとたまりもない。

「「わーーーーーーーっ……」」

　蕪童話のようにゴロゴロと5人束になって転げて、部屋を区切っていたパーティションを破壊する。その余波でそちらのブースに置かれていた機材、特に本物の先輩型ロボット（？）が倒れ・崩れて盛大な騒音を巻き散らかす。

　どんがらがらがらがらがらがらがらっしゃーーーーーーーん……

　……なんだなんだと飛び出てくる向こう三軒両隣の部室にたむろしていた文化部の人々、特に一番先に駆けつけた、いやおそらく最初から物陰に潜んでこの痴態一部始終を観ていたであろう女子のスマホがフラッシュを激しく焚きしめる。

「梶場！　情報源はまたおまえか！　このパパラッツィオーネ！」
「だって話題の人気お寿司食べようって延々何時間も並んでたら鼻の下2mに伸びてる本田クンが晴井先輩と一緒に腕組んでやってきて横入りするんだもーん。ムカつくじゃなーい？」
「ちゃんと予約したんだよ！
　いや腕なんか組んでねえ！　マスゴミ怖えぇ！」
「「「寿司！？」」」
「善二郎は関係ないだろ。
　違う待て、先輩の奢りだ、奢り」

「そのあとホテルでシャンパンとな」
「「ホテルゥウウウウ！？」」
「ちが、ちょっ、先輩、嘘はいけません、嘘いつわりは」
「嘘じゃないよ、前もって言っとかないと冷えてないだろ。ちゃんと勘定についてたわい」
「いやだから」
「ちょっと！　ちゃんと聞かせなさいよ！」
「ぽんちゃんお寿司ー！　お寿司行こうようー！」
「ところで拙者は何をすればよかったのでしたかいな？」
「だーかーらー」
「……嗚呼、本田くんが川崎くんの腕に抱かれてる……嗚呼、やっぱりふたりはそういう！　薔薇の絆！　ここは隠されし薔薇の園！」
「元口さーん！　ちーがーうー！
　梶場！　だから写真を撮るな写真を！」
「じゃ動画にする。あストリーミングで生中継がいい？　了解生ね。生好きだよね本田クン。いっつも生だもんね」

「Ａ～Ｈ～Ｏ～。
　ライヴって言え～」
「……ほんだぁーッ！　テロの会場はここかぁーッ！！」
「ああ局長まで……局長、あとで必ず丁寧にご説明申し上げに参りますので、ただいま現在のところは何卒、何卒陣屋にお戻りになられて」
「私は何を斬り刻めばいい？
　実在か？　空か？　それとも、己自身を？」
「ざるうどんの上に乗せる海苔なんかいかがですか。細く、できるだけ細く」
「わかった。まず民主主義からだな。さすがは我が片腕、いつも私の言いたいことを言ってくれる」

　やんやかやんやか。

　野次馬が好き勝手にベラベラしゃべり出して噂話だか議論だか口喧嘩だか始めるものだから、もう俺たち関係なく老朽化と管理人不在でモメるマンションの住民自治会みたいになってる。

　ここは中国の田舎町か。

「……ソー、おい、ソー」
「なんです、先輩。
　怪我はなかったですか」
「そんなもんしてられっか」

　こっそり袖を引いた先輩を振り向く。先輩は真顔で言う。

「……わかったぞ」
「なにがですか」
「これが、しあわせだな」

　で、にこっ、と笑った。
　おいしいお寿司を食べたあとよりも、嬉しそうに。

「いや、違うと思います」
「けひひ」

　俺の呆れ顔には肩をすくめて笑った。
　まあ、それだとは言えないが、それではないとも、言えない。

「……ほら、はやくお目覚めのチューをしろ」
「さっきぶちかましたじゃないですか」
「そっちからだ」
「どっちからでも同じですって」
「時間の不可逆性を声高に訴えていたのはどこの誰だ」
「いやあのですね」
「あー！　またイチャついてるー！」
「「なにィ！？」」

　――愛とはそれ自体が抑圧、つまり暴力ではないかとたまに想う。
　暴力無きことが幸せの条件だとするのなら、愛もあるいは無い方が無難なのかもしれぬ。
　しかし、我々はそれ、つまり愛によって暮らしが薔薇色に変わることも実感としてよく識っている。

　つまりしあわせというのは、変化し続ける状態のことを指すのだろう。愛が抑圧に至る手前で留まりながら、誰かに与え、また誰かから与えられている。この状態のことを、しあわせと言う。
　前者は自分の意志と努力でいまこの瞬間からでも可能であり、後者の可能性は阿弥陀如来のみぞ知る。
　だから常に自分自身で半分しあわせな状態にしておいて、残りの半分がやってくるのをのんびり待つ、のがよかろう。
　できることをやって、できないことは、祈る。
　なむ・あみだぶつ。

　超越とは、相克を解消することではない。
　相克を包みこみながら、なおひたすらに、暮らしていくことである。

「ツカサ！」「ポンちゃん！」「ソー！」
「はぁい〜ぃい〜……」

　人生に意味など無い。

ただ愛があるだけ。

EOF

『この物語は、法律・法令に反する行為を容認・推奨するものではありません』

【参考】

安冨歩『マイケル・ジャクソンの思想』

【奥付】

『超越』

作者　ながたかずひさ

発行日　原版 2017.8.13 / web版 2018.12.24

mail　nagata@mti.biglobe.ne.jp

web　http://rakken.net/

twitter KazuhisaNagata

Transcend
Powered by Kazuhisa Nagata